

温泉地域研究

第 39号

2022年 9月

論文

- 潮湯の入浴方法についての考察～平安時代から江戸時代まで～
..... 進藤和子 (1)

研究ノート

- スイスアルプスにおける休暇旅行の進展と最古の温泉療養ホテル
..... 池永正人 (13)
- 温泉地ウェルネスツーリズムとしての豊後高田
「海風タラソセラピー」の事例研究
..... ジュアンドヤスコ 齊藤雅樹 (21)

講演

- 別府温泉の地学的概要 由佐悠紀 (29)
- 別府の温泉と別府“温泉”大学～地獄から極楽への道～ 飯沼賢司 (35)

書評

- 渡辺裕美著：『絶景温泉ひとり旅 そろそろソロ秘湯』 高橋祐次 (44)

温泉地情報

- 中国福建省福州市 進化を続ける古湯の現状 穎川剛志 (45)

学会記事

- (47)

潮湯の入浴方法についての考察～平安時代から江戸時代まで～

A Study of Warm Seawater Bathing Style
---From the Heian Period to the Edo Period進藤 和子*
Kazuko SHINDOキーワード：潮湯あみ (shower warm seawater) ・蒸風呂 (steam bath) ・
海水浴 (sea bathing) ・寺院の蒸風呂 (steam bath facility at temple)

1 はじめに

平安時代に記録としての初出がみえる潮湯は受け継がれ、現在でも九州、四国、愛媛、大阪、富山、神奈川、茨城などにある少数の施設であるが入浴することができる。

ちなみに西洋での海水浴は、1700年代半ばにイギリスのブライトンで始まった海岸保養が記録としてはやく、潮湯（海水温浴）は同時期にフランスのブローニュに温浴施設が設けられている¹⁾。

筆者は、これまでの潮湯に関する考察対象として、明治になって導入された西洋医学が広めた、海水を温めその中に入浴する温浴を主としてきた。そして海水温浴の呼び名として、我が国で古くから使われてきた「潮湯」という名称を使用していた。潮湯と聞くと現代では温めた海水を入れた浴槽に浸かるという光景を、誰もが思い浮かべるのが一般的である。しかし「潮湯」と呼ぶにあたって、平安期から江戸期までの潮湯の入浴法をできるだけ明確にしておく必要があると考えた。蒸し風呂であったか、沸かした海水を浴槽に入れ浸かる湯（以下温浴）であったかなど、どのような入浴方法で行われていたかを解明するべく考察を行う。

潮湯に関しての主な先行研究を見てみると、茂木一成が、『塩湯少考—平安時代における—』²⁾で、平安時代の潮湯に関する考察を行っているが、入浴法には具体的に触れて

おらず「たんに塩湯とあっても時、所によっていろいろな解釈が成り立ち、決して単純一律的なものではない」としている。

上田卓爾は、『鹽(潮)湯、鹽(潮)湯治、しほゆあみの系譜について—平安期から明治期に至るまでの漢文日記や和歌詞書等に見る日本人と海水のかかわり—』³⁾で、平安時代から明治時代初期までの潮湯の用例を142例あげている。このうち『芳雲和歌集』にある詞書の『しおゆあみんとて八瀬といふ山里に行く』⁴⁾を取り上げるにあたって「しおゆあみとはいうものの(中略)八瀬の塩風呂であり、蒸し風呂というべきものであるが、例として採用した」と述べている。このことから上田は、「しほゆ」「鹽湯」は前提として蒸し風呂ではなく、温浴とみなしていると思える。

井原今朝男は『史実中世仏教』⁵⁾において、「かつて武田勝蔵『風呂と湯の話』(塙新書)は、風呂と湯を区別し、前者を蒸風呂、後者を入浴するもので、釜で沸し湯槽に移して入浴するものと釜の下で薪をくべて沸し入浴するものがあるとした。(中略)湯を入浴としたのは失考であり、指図(醍醐寺の上醍醐西谷風呂指図、本稿4章図2)⁶⁾の復元調査からは湯を浴びる=沐浴施設であった事が判明した。つまり、中世の湯屋・温室・風呂も蒸気風呂と湯を桶で浴びるもので、まさに沐浴にすぎなかった。素裸で湯船に張った湯に肩までつかる入浴風呂は、江戸初期(中略)から

*編集者・ライター (editor & writer)

始まったものとしなければならない」と述べている。

平安～江戸期にわたり、潮湯を行ったと地として名があがる堺（現大阪市）の研究として鶴崎裕雄は、『堺、塩風呂と連歌—三条西実隆「高野山道の記」に見る都市の一面』⁷⁾で、「(室町時代の)都の人々にとって温泉や塩風呂は魅力であった」とし、「本来、風呂は蒸風呂であって、蒸気に身体を熱して汗を流す。湯は水を沸して湯船に入れ、それに浸る。しかし、江戸時代には風呂と湯は全く混同されてしまう。室町時代の記録も完全に区別することは困難である」としている。

このように、先行研究においても様々な入浴法の考察が述べられている。日記を通して蒸風呂、潮風呂の経済、社会、生活面を読み解く資料としては『戦国期公家社会の諸様相』⁸⁾をあげておく。

2 研究の目的と方法

考察を行うにあたって、前章で紹介した先行研究で述べられている論考を踏まえつつ、文献史料例から読み取れる、潮湯を角度を変えて見ることにより、潮湯の入浴方法を解き明かし、施設はどのようなものであったかなどを解明したいと考察を試みた。

その方法は先行研究、中世の寺院について書かれた書籍、和歌やその詞書、日記、古記録のテキストデータベースなどを参考とした。また『古事類苑』、『時代別国語大辞典』、『江戸語大辞典』、『改修言泉』、『神通史大辞典』、『鎌倉遺文にみる中世のことば辞典』、『増補大日本地名辞書 上方』などの辞典類に例文として引用されていた和歌、日記なども確認材料とし、「しほゆ(湯)」「しほゆ(湯)あみ」、「鹽湯治」「鹽湯」、「潮湯」、「鹽風呂」、「潮湯治」「塩風呂」などの語句のある史料を選び検討した。

塩湯とされているが、製塩された塩を湯に入れて使用したと思われる場合は、検討の対象とした。また、塩湯と表記しているが、塩

を湯に溶かして祓いに使用する場合と薬草と同様に傷に直接塗布する塩湯は除いた。

3 潮湯に関する記述について

(1) 潮湯という言葉の初出

潮湯(塩湯)という言葉の初出と思われるものは、平安前期(1018～1023頃)に編まれた『権中納言定頼卿集』⁹⁾に見ることができる。

「九月ばかりさか井と云う所に、しおゆあみにおはしけるに、ひめぎみの御もとに、すみよしの なかみのうらもわすられて都へとのみ急がる、哉

かへし

立ちかへり ひごろのふれは住吉の 猶ながあする浦とこそ見え

さか井といふ所にしほゆあみにおはしたりしに聞こえし

おぼつかな さかみはるけき旅人のなが井の浦にながあする頃」

と「しほゆあみ」が詞書に見える(以下、ボールド表記は筆者による)。

ここにある「ながみ(井)の浦」というのは、堺の港名の呼称¹⁰⁾で、元禄年間まではこの名で呼ばれていた。

日記における初出は、藤原実資の日記『小右記』の万寿2年(1025)11月26日の条、「今日内府向岡屋、加鹽湯治七ヶ日許云々、従河尻、入小船、運惟時朝臣宅(并往還人可取事煩云々)」¹¹⁾が早い例と思われる。

(2) 和歌、詞書に見える潮湯

潮湯関連の語句のある和歌と詞書の52作例から検討した。「しほゆあみ」「しほゆ」などの名詞と、「しおゆあみて」「しほゆあみんとて」と「しおゆ」という名詞に説明の動詞がついている二種類の表現があった(表1)。

この二通りが書かれた例をあげると、源俊頼の『散木奇歌集』(1128)詞書に、「しほゆあみにつのくになる所へおはしけるに、ぐしてまかりてしほゆはてて」¹²⁾とある。

表1 詞書に見える潮湯に関する語句

語句\時代	平安	鎌倉	室町	江戸
しほゆあみ	21	3	2	
しほゆ	3	1		
しほのゆ	1			
うしほ湯				1
しほゆの所に	1			
しほゆあみて	6	1	1	
しほゆあみんとて	1			
しほゆあむとて	1			
しほゆあみ侍る	1			
しほゆあみける		2		
しおゆあみしに		1		
しほゆあみはてて		1		
潮湯をあみて				1
しほゆあみられ	1			
しほゆあむる人	1			
しおゆにおはして	1			
しほゆいでて	1			

(注) 筆者作成。

しかし、和歌そのものに「しほゆ」という言葉が詠みこまれている作例は見当たらない。和歌と詞書の内容は、都を思う気持ち、出向いた先の風物がほとんどで、具体的にどのように入浴したかは書かれていなかった。

作例に見える「しほゆあみ」と「しほゆ+あむ(浴びる)の変化形がついた表記について、『時代別国語大辞典室町時代編』(以下大辞典室町と略)では、しほゆ「[潮湯・塩湯]海の水をわかつた湯。また、それに浴すること」¹³⁾とあり、あみはあぶの項に、「[浴ぶ]湯や水をかけて身体を洗う」¹⁴⁾となっている。また『改修源泉』では、しほゆあみ「潮浴・汐浴海水温浴または海水浴」¹⁵⁾となっている。

これらからは、浴室の構造はわからない。入浴法は沸かした潮湯を浴びたり行水であったと推測できるが、蒸し風呂であったとは判断しづらく、浴槽に沸かした潮湯を入れて入る入浴方法も否むことはできない。

(3) 日記、寺社雑事記に見える潮湯

漢文日記、和文日記、寺社雑事記の37史

表2 日記・雑事記に見える潮湯に関する語句

	平安	鎌倉	室町	安土 桃山	江戸
塩(潮)湯	16	1	1		
浴塩(潮)湯	6		4		
為潮湯	2				
沐塩湯	2				
塩風呂			△1	*1	1
しほ風呂			*1		
潮風呂					*1
塩湯治	2				*1
塩湯の湯治			*1		
しほ湯湯治			*1		
沐浴入塩		1			

(注) 筆者作成。*和文日記 △雑事記

料に見られた潮湯に関しての用例から入浴法を検討する(表2)。

史料の多くには「○○潮湯」という体言止め、あるいは「浴塩湯」や「沐塩湯」のように行為がわかる言葉が、前につかたちで記されている。用例をあげると、

藤原忠實の『殿歴』に「康和二(1100)年二月廿日 大殿并北政所・齊院御成信房御塩湯、廿一日 辰許予浴塩湯」¹⁶⁾、源師時の『長秋記』に「為塩湯下向鳴尾事 長承三(1134)年九月十三日未 晴 已剋出立、為塩湯向鳴尾庄云々」¹⁷⁾、三条実躬の『実躬郷記』に「嘉元四年(1300)十月三日 禪閣(藤原公貴)自今日御沐浴入塩」¹⁸⁾などというものである。

『大辞典室町』では、潮湯・塩湯と浴は前項の「しほゆ」と同じ説明である。沐浴は『時代別国語大辞典・上代』に「(ゆかわあむ)水を浴びて身を齋みきよめる」¹⁹⁾『大辞典室町』には、「髪と身体を洗う、湯や水で髪や身体の穢れを洗う事」²⁰⁾となっている。入塩は、湯に塩を溶かしたものか、塩湯の湯を省いて表記したのか判断はつかない。これらの語句は平安時代の史料に多いこともあり、温めた

海水を浴びたり、行水をしていたと思えるが、この時期の寺院の施設が蒸し風呂であったので、蒸し風呂の可能性も残しておきたい。

また塩風呂は、『大辞典室町』に「海水を沸かして、その蒸気に浴する風呂」²¹⁾とある。この蒸し風呂であろう語句のある安土桃山時代以後に見られる史料の5例をあげる。

尋尊編『大乘院寺社雑事記』文明十三年(1481)三月廿日に、「西・吉田父子・竹内・常善院・明王院等堺之塩風呂に入云々」²²⁾、連歌師宗長『宗長手記』大永六年(1526)七月に「興津左衛門の館、しほ風呂興行。一七日湯治」²³⁾、上井覚兼の『上井覚兼日記』天正13年(1585)十月六日に、「未之刻計白濱(桜島)へ着候、暫塩風呂などに入候て慰」²⁴⁾、山科言緒の『言緒郷記』元和三年(1617)十一月三日に、「中風為養性塩風呂従今日造作」²⁵⁾、桃節山『西遊日記』慶応元年(1865)八月一日の「潮風呂今日より焼候由なれば(中略)都合五人に而潮風呂に浴す。潮風呂は全く薬湯之由、潮を焼候蒸風呂也」²⁶⁾である。

また、「塩湯治」²⁷⁾という用語は『小右記』の「萬壽二年(1025)十一月廿六日 今日内府向岡屋、加塩湯治セケ日許云々」²⁸⁾と『宗長手記』大永四年(1524)十一月末の「潮湯の湯治」²⁹⁾の2例であった。史料とした平安時代の日記には「塩湯」とあるが、「塩風呂」の表記はなかった。潮湯の湯治関連として、『小右記』、『殿暦』、『台記』、『中右記』、『玉葉』、『園太暦』に記述があった。この日記には、日数の記録や前後に普通の水を温めた湯(水湯)などのことも記録されている。用例として一番詳しい『台記』をあげる。

「康治二年閏二月大十三日自十六日、可浴塩湯、仍自今日、浴水湯」「康治二年閏二月大十六日 自今日塩湯、毎日二度」「康治二年閏二月大廿三日 自今日水湯、毎日一度」³⁰⁾とあり、期間は7日間で、1日に2度浴し、潮湯の前後に水を沸かした湯に浴していることもわかる。この4年後の「久安三年二月」

にも、中断があるものの9日間潮湯に浴している。これを見ると、温泉湯治と同様に疾病軽減や療養のために日を決めて行ったとわかる。

(4) 室町後半から江戸期の紀行文、旅日記、絵図などに見える潮湯

室町後半以降になると、仮名交じり文も多く、表現も多彩な史料を見ることができる。これらから読み取れる範囲で、蒸風呂、海水温浴、判断がつかないものと分類し、確認した33の史料名のみをあげ表3を作成した。史料名には①～③③まで番号をつけ、表には番号で表記した。

表を作成するにあたって確認した史料のうちいくつか例を挙げて、入浴法の根拠を説明をする。

1) 蒸し風呂とした判断史料をあげる。

③『言緒卿記』³¹⁾の「元和三年十一月三日(1617)中風為養生塩風呂従今日造作」の自宅に塩風呂を造ったという内容から、⑧『西遊日記』³²⁾の「潮風呂に浴す」「潮を焼候蒸風呂也」と蒸風呂と書いてあるので、③『鈴木正三 片仮名本因果物語』では「慶安四年(1651)三月。要津長老。京四条ノ塩風呂ニ入玉フ」³³⁾と京四条の蒸風呂が舞台になっているので、③『芳雲和歌集』³⁴⁾には「しほゆあみんとて八瀬といふ山里に」と蒸風呂だった八瀬という言葉があるので、江戸後期の風俗誌③『守貞謾稿』³⁵⁾に江戸の蒸風呂の絵と説明がある。以上のことから蒸風呂と判断した。

2) 蒸し風呂の可能性があったとした判断史料をあげる。

①『実隆公記』に「大永四年4月28日(1524)阿弥陀寺(旭蓮社)へ招請(中略)近き寺の風呂に入りて(中略)光明院へ帰るほど」³⁶⁾とある。また②『言緒卿記』に「永禄七年(1564)七月七日 自知恩院堺之旭蓮社へ、塩風呂之儀許状到」³⁷⁾とあるのは、許可を取って、堺で7日間の塩風呂に入った記録である。両者とも室町後期で同じく寺院という事もあり、

表3 試行 蒸風呂か温浴か入浴法の区分け(室町～江戸)

蒸し風呂	蒸し風呂の可能性あり	どちらともいえる	温浴の可能性あり	温浴	海水冷浴も行った
③、⑧、③① ③②、③③	①塚、②塚、④ ⑤塚、②⑨塚	①①、①②、①④ ①②①、①②②塚	①①⑥、①②⑧、①③⑩	①⑦常、①⑨、①⑩、①⑬常 ①⑮、①⑰常、①⑱常、①⑲、①⑳ ①㉓、①⑳④、①㉕、①㉖、①㉗	①⑥、①⑨ ①⑩、①⑰

(注)筆者作成。

【史料名】：〔日記〕①『実隆公記』、②『言継卿記』、③『言緒卿記』、④『上井覚兼日記』、⑤『多聞院日記』、⑥『柏崎日記』、⑦『清河八郎遺著』、⑧『西遊日記』、〔徳川家関連〕⑨『知多潮湯湯治 秀忠書状』、⑩『知多潮湯湯治(松平忠吉書状)』、⑪『徳川実記』、⑫『編年大略』、⑬『天保就藩記』、⑭『越前松平家家譜』、〔許可記録〕⑮『尾州觸帖通辞留』(宝暦13年)、⑯『尾州觸帖通辞留』(享和元年)、⑰『陸奥守山領御用留帳』(弘化2年)、⑱『陸奥守山領御用留帳』(安政2年)、〔連歌師日記・紀行〕⑲『紹巴天橋立紀行』、⑳『東国紀行』、㉑『宗長手記』、〔名所図会〕㉒『和泉名所図絵』、㉓『摂津名所図絵』、㉔『尾張名所図絵』、〔引札〕㉕『伊勢一志郡香良洲神社絵図』、〔医学書〕㉖『窠篤兒(ワートル)薬性論』、㉗『戸塚静海 失勃児督(シーボルト)処方録』、㉘『養生訓』、〔制状〕㉙『秀吉制状』、〔掟書〕㉚『石田正継塩風呂掟書』、〔仮名草子〕㉛『片仮名本因果物語』、〔詞書〕㉜『芳雲和歌集』、〔風俗誌〕㉝『守貞謄稿』である。この他、常陸の資料で、明治以降の郷土史などに江戸時代の事としているものがあるが参考にするにとどめた。

当時の寺の風呂というのは通例は蒸し風呂とされているので、可能性があると思われる。

3) 海水温浴とした判断史料をあげる。

常陸の海岸沿いに点在していた潮湯に関しては、「安政年間に、関丑次郎なるもの焼石を風呂に投じて海水を沸かし、入浴するに至り」³⁸⁾や、鮎川浜にある浴潮碑の碑文に「黒沢翁善右門が天保年間に礁間の温かい潮水を発見して」など、この地の資料に見ることができる。これらから温浴と思えるので、⑦『清河八郎遺著』「幸此浜村毎に潮湯のありける故、村毎に一、二夜づつ浴湯いたし」³⁹⁾、⑬『天保就藩記』「瑛照院(水戸二代藩主斉昭の母)様北浜へ潮湯治に被」⁴⁰⁾、⑰⑱『陸奥守山領御用留帳』(弘化2年・安政2年)「水戸磯之浜ニ潮湯治仕度」⁴¹⁾(図1)とあり、以上4史料は温浴と判断した。

知多潮湯治(現常滑市大野)に関する史料では、⑨『知多潮湯湯治 秀忠書状』⁴²⁾、⑩『知多潮湯湯治(松平)忠吉書状』⁴³⁾、⑮『尾州觸帖通辞留(宝暦13年)』⁴⁴⁾、⑳『尾張名所図絵』がある。『尾張名所図会』の中の「潮湯治」の絵図は庶民らしき群衆が、今でいう海

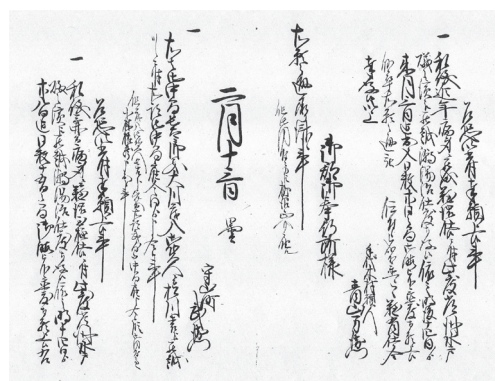


図1 常州水戸の磯之濱への潮湯治願い
(注)郡山市歴史博物館蔵。

水冷浴を行っているものである。その説明には「旅館に此海潮を汲みとらせ、再び湧かして浴するもあり」⁴⁵⁾とある。これからは明らかに温浴をしていたことがわかる。従って知多の潮湯は温浴であったと判断した。また、絵図にも描かれているように、季節によれば海水冷浴も行われていたと思える。

名所図会関連では、『摂津名所図絵』にも温浴と分かる住吉神社の御輿洗いについての記述がある。「六月十四日 塩湯 此日近世

より諸人社頭に群さんし、住吉浦の潮水に浴し、百病平癒を祈るに(中略)この浦の塩湯時節の太陽熾んにして、海浜に徹し潮水を熱す。故に萬病これに触れば、忽ち陽気皮膚にめぐりて平癒す」⁴⁶⁾とあり、これは自然発生の温浴である。

次に紀行文に見られる海水温浴をあげると、⑲『紹巴天橋立紀行』には、「宮川という村より文殊堂に入、院主出むかえ、寺前乃潮をくまさせて焼たる風呂に入」⁴⁷⁾とある。

⑳『東国紀行』には、三河国西郡(現蒲郡市)鶴殿氏の元で、「越年をもおなじくはここほどにてとのこころざしなれば。いなびがたき成るべし。毎日潮をくませて。孝行湯養生第一なり。東国の湯治も此分にやと思いつつ」⁴⁸⁾とあり、この「東国の湯治」というのは熱海の湯治を示すもので、これは温泉に浸かる入浴法である。

このことから、2つの紀行文に、「潮をくませて」という共通の記述があるので、近くの海から海水を汲んで温めた潮湯に入った温浴と判断した。これら潮湯はもてなしであった事も伝えている。

最後に医学の処方書をあげる。江戸後期の⑳『窠篤兒(ワートル)薬性論』⁴⁹⁾と㉑『戸塚静海 失勃児督(シーボルト) 処方録』⁵⁰⁾には、医学的治療法としての海水温浴が記されている。我が国の医学書では、貝原益軒の㉒『養生訓』に、「海水を汲んで浴するには、井水か河水を半(なかば)入て、等分にして浴すべし」⁵¹⁾としている。これは行水の場合もあるが温浴と考えたい。

4) どちらともとれる例をあげる。

紀州藩主の徳川頼宣の別邸が野島(鎌倉幕府の外港で、金沢文庫が設けられた景勝地。現横浜市金沢区)にあり、そこでの潮湯に関しての史料である。その㉓『徳川実記』(1844年)には「寛永廿年(1643)八月六日 鎌倉へのいとまたまふ。これは塩湯あみに赴かるゆへとぞ聞こえし」⁵²⁾とあり、『天寛日記』⁵³⁾(『徳川実記』を編纂するにあたっての原記録。

1580～1643年の徳川氏の記録)には「鎌倉塩風呂へ湯治御暇也」とある。同じ事実を述べているのであるが、表記が「塩湯あみ」と「塩風呂」と2通りになっており、温浴(沐浴、行水、湯船に浸かる)か蒸し風呂のどちらであったかは語句からは判断できない。

ここで見方を変えて注目したのは、塩湯をひらがなにした「しほゆあみ」は平安時代の和歌の詞書に多くみられ(表2参照)、「塩風呂」は室町以降に見られる(表3参照)語句であるという点である。『天寛日記』に記された「塩風呂」は200年の年を経て「塩湯あみ」と時代を遡った表記に置き変わっている。これは、あえて昔の呼称を使ったのではなく、『徳川実記』の編纂当時、銭湯が蒸し風呂から、真水を温めて浴槽に入れ浸かる湯(真水の温浴)になっていき、世間では入浴することを湯あみとも、風呂とも呼んでいたもので、深い意味もなく書き替えたと思われる。ここに、入浴に関する呼び名の推移の一端を、徳川家の史料から見出すことができる。

このように、この期の史料からは入浴法の推察をすることができるものが多くあった。

4 潮湯が行われていた場所について

(1) 潮湯はどこで行われていたか

潮湯がどこで行われていたか、平安期から江戸期までの和歌とその詞書、日記、紀行文などの史料に見られた地域を、旧国名区分で集計し、検討した(表4)。

表を見ると、平安から鎌倉期には、摂津国と和泉国にある難波潟沿岸(大略北尼崎より南堺浦まで)⁵⁴⁾と内陸にある山城国で多く潮湯が行われていたことがわかる。そして室町から安土桃山期になると伊勢湾や駿河湾や薩摩の地名が見え、次第に大阪湾沿岸の地名は減少する。江戸期になると相州、常陸と東国へと広がるばかりではなく安芸や越後の地名も出てくるのがわかる。

また、茂木は平安時代の潮湯の行われた場所について「大体塩湯はその原料である海水

表4 潮湯の行われていた場所 (旧国名別)

時代/国名	摂津	播磨	淡路	和泉	山城	安芸	伊予	薩摩	尾張	駿河	相模	常陸	越前	越後
平安	26	2		5	17									
鎌倉	4	1	1	1			1							
室町	1			4	3				1	2				
安土桃山				1				1	1					
江戸	2			2	2	2			5		1	4	1	1

(注) 筆者作成。

を得やすいところでおこなわれるのを常とするものであり(中略)上皇または藤原摂関家という有勢者は莫大な費用をかけてその原料である海水を船でもって運搬することが出来たのであるが、それ以外の一般貴族では(中略)内海沿岸にある自己の所領か、もしくは大寺に出向いて行かねばならなかったのであった⁵⁵⁾と述べている。

平安時代の山城国(現・京都府南部)では都の邸宅か、海水を運びやすい淀川に続く川沿いの宇治、鳥羽、岡屋、河尻(鴨川と淀川が合流する地点の船津)⁵⁶⁾などにあった有力者の別邸もしくは潮湯の施設であろう計17か所が記録されている。一方、一般貴族が潮湯へ出向いた場所であろう摂津や和泉の沿岸部にある、地名や寺名も33カ所記録されている。

山城国の例としては、藤原宗忠の『中右記』に、

「永久二年(1114)九月六日 法王近日依御塩湯事、御鳥羽也⁵⁷⁾と、白河法皇が鳥羽(おそらく鳥羽離宮であろう)で潮湯を行うことが書かれている。

都から離れた沿岸部の例としては、藤原清輔撰の『統詞花和歌集』永万元年頃(1165)に、「津の国なる所にしほゆあみにまかれりける頃中納言国信せうそこして侍りけるに⁵⁸⁾とある。この詞書から、津の国(摂津)で潮湯あみをしていたことがわかる。この例は、一方は法皇という優勢者であり、一方は中納言という位の公家の例である。

潮水を運んだ記録としては、京都府伏見にある醍醐寺の、山間に位置する上醍醐の湯屋で潮湯を行ったことが、鎌倉初頭の醍醐寺の僧・慶延撰述(1186頃)の『醍醐雑事記』に記されていた。

「久寿元年(1155)十一月十九日酉刻大湯屋釜鑄了」。「久寿二年二月九日大僧都⁵⁹⁾御房運潮於寺家有御湯治事。(中略)日別可入定十三石許也沸二釜、又下水并宇目水乃料程也、一釜二四石八斗入也(中略)此潮八十四石八斗者不足也、九十余石可入也後注之於栢杜御所思召之⁶⁰⁾」

とある。湯釜を鑄造したので、潮湯を行うというものである。その量は、一日に十三石で、内訳は、釜二つ分(9石6斗)に継ぎ足す水などを加えたものである。全部で九十余石とあるので約7日分となり、潮湯湯治を行ったと思われる。この潮水はリットルに換算すると約1万5300リットル、家庭用浴槽に換算すると約80槽分程ということになる。

注目点は、この潮水の量に「宇目水(うめみず)乃料」が含まれていることである。これは熱い湯を適温にするときの潮水と思われる。そして全体の潮水の量と、この「宇目水」を必要としたことから、蒸し風呂ではなく、温浴であったとも考えられる。第1章で「中世の湯屋は沐浴施設であった」という井原の見解をあげたが、その根拠の指図(図2)は永正十八年(1521)のもので、潮を運ばせた記録のある久寿元年から365年後のものである。従って湯屋の構造としては参考になる。

が、同一ではないと思われ温浴の可能性も残したい。

しかしこの指図を復元した模型(図3)は、施浴が行われ、時代が下ると銭湯の役目もした寺院の風呂の構造を知ることができる貴重な資料である。屋外で沸かした湯の蒸気を送り込んだ浴室では、垢を落とし、湯をかぶるとい入浴を行っていたと思われる。

(2) 堺の潮湯について

次に、潮湯が行われた場所として、「さかひ」「ながるのうら」「泉州堺」などの地名で示されるのが「和泉国」現在の大阪府堺市である。行基が開湯したと伝わる堺の塩風呂は、平安時代では、『権大納言定頼卿集』⁶¹⁾・『守覚法親王集』⁶²⁾、室町時代には、『碧山日録』⁶³⁾、『大乘院寺社雑事記』⁶⁴⁾、『実隆公記』⁶⁵⁾、『言継卿記』⁶⁶⁾、『秀吉朱印状』⁶⁷⁾(秀

吉の与えた諸役御免の制状)、『石田正継塩風呂掟書』⁶⁸⁾、『多聞院日記』⁶⁹⁾、江戸時代は『和泉名所図会』⁷⁰⁾で確認することができた。

さらに、「文久改正堺大絵図」(図3)には現在の堺の西六間筋に「塩風呂丁、塩プロ」の文字があり、この辺りに塩風呂があった事がわかる。この場所は、現在は海岸から1キロ余り離れているが、平安時代は湿地帯も多く汀線は今より近かった。

『堺市史』には『潮湯浴とは身を海水にひたすのではなく、海水を沸かして温浴するもので(中略)海浜の地でなくとも、塩湯を沸かして入浴することが行われたものと見える。堺の塩湯は其伝が最も古く、其地も海に浜しているから、酌んだ海水を沸かして入浴したのは言うまでもなく、其湯も海浜近くにあった事は、(定頼集に)、「しほゆにおわして、あかつきかたになみのたては」とある』⁷¹⁾と書かれ、およそ千年前の平安時代には海辺に潮湯があったことを指摘している。

このように古くからの潮湯の地であった事について、渋谷一成は、『史料紹介 大阿弥陀経寺蔵「石田正継塩風呂掟書」(1588)の「堺と塩風呂」の項で、「和泉・摂津の国境に由来する堺という都市が形成されはじめる草

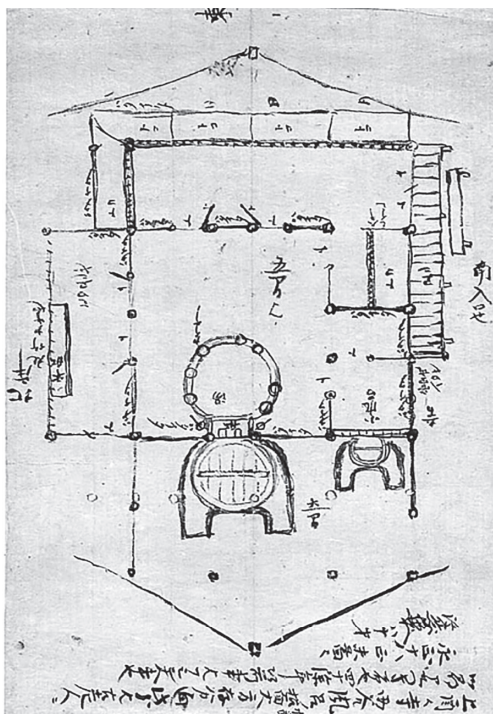


図2 上醍醐西谷湯屋指図(1521)

(注) 国立歴史民俗博物館所蔵。

大小の竈。蒸気風呂と推定される小風呂、湯を浴びるための大きな湯釜と周囲に円形をした湯を汲むカイケ(掻筒)、上がり湯に使うと思われる水船が描かれている。

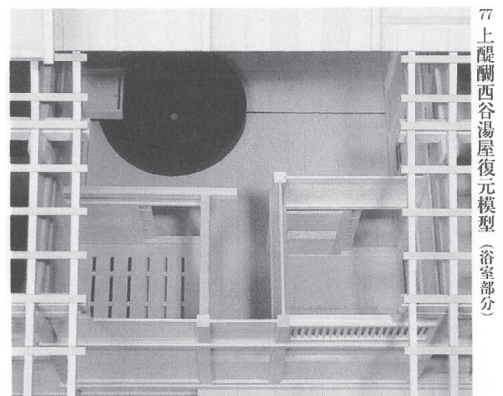


図3 上醍醐西谷湯屋復元模型

(注) 国立歴史民俗博物館提供。

浴室部分の模型。左上部の円形のもの、浴びるための湯が入った湯釜。その下に見える篋の子の小部屋は、下から湯気が昇ってくる構造の蒸し風呂。

創期に、熊野詣などで京都と紀伊国を行き来する人々に、堺の町が潮湯治・塩風呂とセットで記憶されていた点は興味深い」と述べ全文を翻刻し内容を概述している。

入浴法を知ることができる箇所をあげると、

「猥湯を取族一切令停止畢、殊更近年宿々江(中略)湯を取望(中略)自今以後堅可令停」、
「自然、功德風呂又他国之客人於在之者、風呂銭式百疋いたし、壺時之間可相止」

「二百疋雖出(中略)入族無尽期条、不寄男女不可、過三拾人事」

などであり、宿などで塩湯を持ち帰って利用していたこと、功德や接待にも使われていたこと、貸切風呂にできたこと、その際も大勢で入ることを禁じ30人までと制限したが、かなり広い入浴できる施設であったことをうかがうことができる。

また「塩風呂」について、『その名の通り海水を使って沸かした風呂のことを指す。塩風呂は、「潮湯浴(しおゆあみ)」とも記され、海に近い堺の町では、地中を掘ると井戸から海水が湧くこともあったと考えられる』とも述べており、温浴とも思えるが、寺社の施設でもあるので断定はできない。

この井戸から汲み上げた海水は現在では、塩化物泉として温泉といえる水質であったと考えられ、その効能が推し量られる。ただ、潮湯の施設が複数あったのか、1か所であったかわかる史料は見つかっていない。古くから都人が訪れ、南蛮貿易と町人文化が栄え、自由都市ともいわれた堺の潮湯は、憩いの場として広く知れ渡っていたと想像できる。このことは、江戸時代まで塩風呂を所領していた旭蓮寺の寺史、山田智旭編(1991)の『本朝廬山旭蓮寺』に詳しく記録されている。

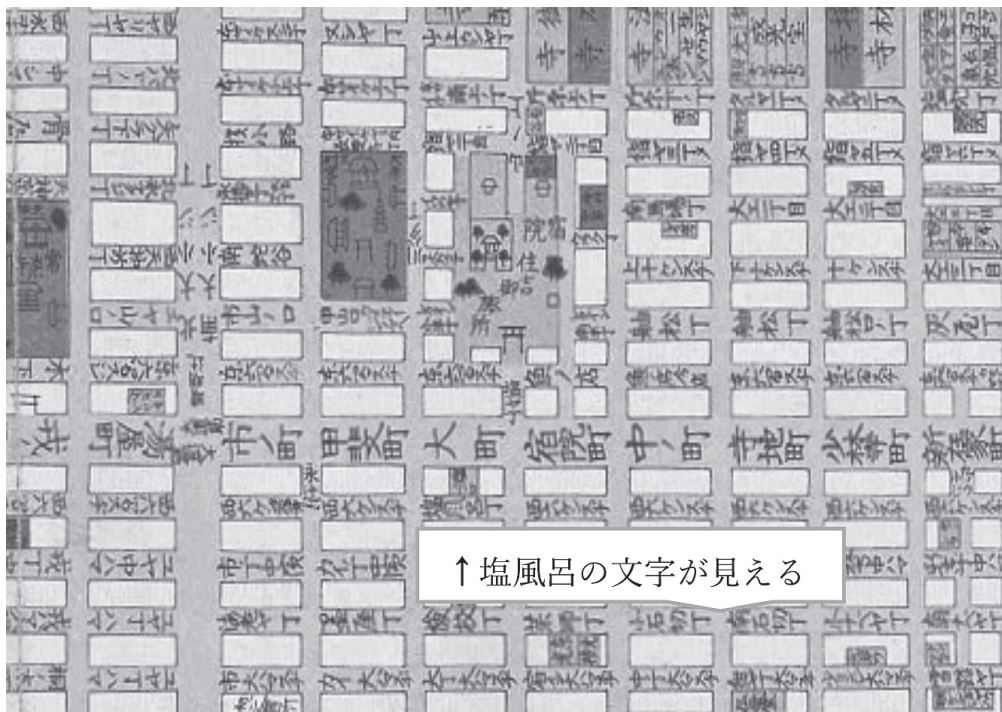


図4 「文久改正堺大絵図」(部分)(1863年)

(注) 堺市図書館提供。湯屋町や塩風呂丁、塩風呂の文字が見える絵図。塩風呂は、現在の宿院駅に近い大町東にあり、江戸末期までは旭蓮社の管理下にあった。

5 まとめ

潮湯はどのような入浴法で行われていたかを、視点を変えて見てきた。医療の発達も遅く、疫病の流行や皮膚病に悩まされていた時代に、その改善効果を潮湯に求め、娯楽や癒しの場としたことも自然なものだと思える。

その方法は、太陽に温められた海水の湯溜まりに浸かったというような自然発生的な行為や、温めた潮水を浴び行水のようにであったかもしれない潮湯あみ、潮水の蒸気が満ちた浴室に入る風呂、温めた潮水を浴槽に溜め身を浸す温浴の4方法と言えよう。この風呂は、寺院での蒸し風呂と同じく、大釜で潮水を温め浴室に蒸気を送ってその中に入る方法と、岩穴などの中で火を焚いて熱した後に、潮水などで濡らしたムシロを敷いてその上に寝転ぶ石風呂（潮湯の浴槽を備えているものもあった）といわれる方法がある。

平安時代の和歌の詞書に多く見られた「しほゆあみ」からは、潮湯をかける沐浴のようなことであったと推察はできるが、施設の具体的な姿はみえてこなかった。日記に見られた風呂という入浴法は、上醍醐西谷風呂指図を参考にできることもあり、蒸し風呂の潮湯

もあったとわかった。その反面、潮湯ではないが寺院の風呂を描いた文永年間（1264）の「富山・本法寺蔵法華経曼荼羅」⁷²⁾や延慶元年（1308）の「是害房絵巻」（図5）⁷³⁾、『蔗軒録』⁷⁴⁾の文明十七年（1485）と同十八年（1486）の条に潮湯の記録がある施福寺（大阪府。詳細調査中）の「施福寺参詣曼荼羅」⁷⁵⁾には、浴槽に浸かる姿が描かれており、風呂と表記されていても温浴であった場合もあると思われる。本稿第3章4節では、史料に基づいて入浴形態を分ける試みを行ったが、浴場の場面を決定づける絵図も記述もほとんどないのが現状であった。しかし、潮湯には多様な入浴方法が行われていたことがうかがえた。

このように、時代、場所、利用者によって蒸し風呂か温浴であったか、これらの複合であったかは未だ明確にはできていない。明治以降は、温浴が一般的になったことから考えると、先行研究が述べているように、室町後期から徐々に温浴になっていったとも推察できる。

さらに、施設の構造、燃料の調達、海水の運び方、その担い手などに関し、絵図や史料、

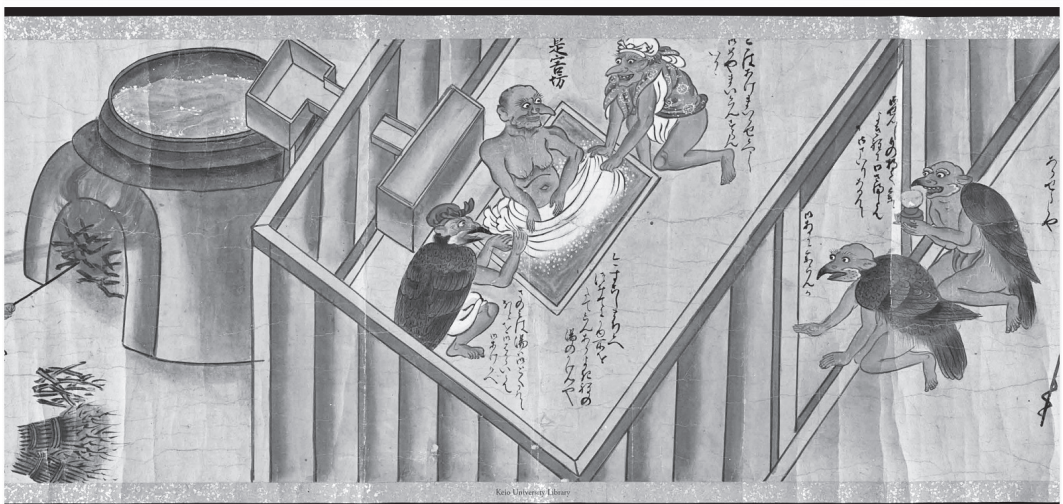


図5 是害坊絵巻の一場面（残闕本・室町末写）

（注）慶応義塾図書館蔵。渡来した大唐の天狗是害坊が、比叡山の僧と法力を争い、負かされて痛んだ身体を、加茂川のほとりで、日本の僧に世話されながら、薬草入りの湯に浸かる図。

地方史、市町村の庶民の記録を詳細に辿り、潮湯文化の詳細を明確にする必要を今後の課題としたい。

注・参考文献

- 1) アラン・コルバン(1988) 福井和美訳(1992):『浜辺の誕生—海と人間の系譜学』(藤原書店)、479-539頁。
- 2) 関西大学史学地理学会編(1960):『史泉』第18号、26-34頁。
- 3) 『大阪観光大学紀要』第16号、1-16頁。
- 4) 武者小路実篤(1942):『芳雲和歌集』(河出書房)。365-366頁。
- 5) 今井今朝男(2011):『史実中世仏教』第1巻(興山舎)、174頁。
- 6) 『国立歴史博物館図録』(2002)「中世寺院の姿とくらし—密教・禅僧・湯屋」75頁。国立歴史博物館の所蔵資料の中から発見され、湯屋を復元した模型もつくられている。
- 7) 鶴崎裕雄(1983):『ヒストリア』100号、大坂歴史学会46頁。
- 8) 中世公家日記研究会編(1992):『戦国期公家社会の諸様相』(和泉書院)。
- 9) 『群書類従第14集 権中納言定頼卿集』、217、219、222頁。
- 10) 三浦周行監修(1929):『堺市史第一巻』、163頁。
- 11) 国会図書館デジタルコレクション(以下国会DCと略)『小右記 三』、58コマ。
- 12) 『群書類従類第十五輯』「散木奇歌集」77頁。
- 13) 室町時代語辞典編修委員会編(1994):『時代別国語大辞典室町時代編』(三省堂)、375頁。
- 14) 前掲13)、179頁。
- 15) 落合直文(1928):『改修源泉』(大蔵書院)、1990頁。
- 16) 東京大学史料編纂所(1963):『大日本古記録 殿歴二』(岩波書店)、20頁。
- 17) 国会DC『史料大成7 長秋記二』、220頁。
- 18) 東大史料編纂所(2012):『大日本古記録 実躬郷記七』(岩波書店)、263頁。
- 19) 上代語辞典編修委員会編(1990):『時代別国語大辞典上代編』(三省堂)、777頁。
- 20) 前掲20)、425頁。
- 21) 前掲20)、374頁。
- 22) 辻善之助(1964):『大乘院寺社雑事記七』(角川書店)、276頁。
- 23) 塙保己一編纂(1923):『群書類従三百二十六宗長手記』、324頁。
- 24) 東大史料編纂所編纂(1957):『大日本古記録 上井覚兼日記』、岩波書店、44-45頁。
- 25) 東大史料編纂所編纂(1998):『大日本古記録 言緒郷記下』(岩波書店)、161頁。
- 26) 谷川健一編(1972):『日本庶民生活史料集成20巻 西遊日記』三一書房、632頁。
- 27) 塩湯治を含めた湯治については、石川理夫(2017):『「湯治」という用語の登場と温泉の関わりについての考察』『温泉地域研究』第29号、25-34頁に詳しい。
- 28) 笹川種郎編(1943):『史料大成第3 小右記三』(内外書籍)、99頁。
- 29) 前掲23)、279頁。
- 30) 『増補史料大成 台記一』(臨川書店)、86頁、199頁。
- 31) 前掲25)。
- 32) 前掲26)。
- 33) 吉田幸一(1960):『古典文庫』「片仮名本因果物語二」、108頁。
- 34) 前掲4)。
- 35) 国会DC『守貞謄稿』26コマ。
- 36) 三条西実隆『続群書類従 実隆公記』巻6上(平文社)、「高野参詣日記」721頁。
- 37) 山科言継:国会DC『言継卿記 第三』、425頁。
- 38) 島崎健一(1999):『耕人』10号、「日立の焼石湯と島木赤彦歌碑」、138頁。
- 39) 国会DC『清河八郎遺著』、文久元年(1861)七月廿七日頃。77-78コマ。
- 40) 国会DC、『天保就藩記』、天保4年(1833)五月六日、23コマ。
- 41) 郡山市歴史資料館蔵 『陸奥守山領御用留帳』
- 42) 慶長3年(1598)に徳川秀忠が弟の福松(松平忠吉)の潮湯治先へ送った書状。
- 43) 慶長11年(1606)に松平忠吉が送った塩湯治見舞礼状。曼陀羅寺(愛知県江南市)蔵。
- 44) 名古屋市教育委員会編(1960):『名古屋叢書2巻』83頁に「宝暦十三年 知多郡潮湯治」の承届記録がある。
- 45) 秋里蘆島(1844):国会DC『尾張名所図会』巻の六、41-42コマ。
- 46) 秋里蘆島(1798):国会DC『撰津名所図絵』1(1798)、43コマ。

- 47) 東大史料編纂所編纂：『大日本古記録 紹巴
天橋立紀行』（岩波書店）、707-708頁。
- 48) 宗牧（1545）：『群書類従卷三百四十 東国
紀行』（平文社）紀行部十四 820頁。
- 49) 林洞海訳（1856）：『窠篤兒（ワートル）薬性
論』（早稲田大学所蔵）。
- 50) 中村昭（1995）：『日本医師学雑誌41巻1号』
「シーボルトの臨床医学」。
- 51) 伊藤友信訳（1982）：『貝原益軒（1712）養生
訓』（講談社）、362頁。
- 52) 経済雑誌社（1904）：『徳川実記』、676-
677、716-717、718頁。
- 53) 国立公文書館デジタルアーカイブ、請求番
号163-0180-0058。
- 54) 吉田東伍（1900）：『増補大日本地名辞書
上方』（富山房）、503頁。
- 55) 前掲2)、33頁。
- 56) 西岡虎之助（1966）：『莊園史の研究』（岩波
書店）。176頁。
- 57) 笹川種郎編：『史料通覧 中右記四』、348頁。
- 58) 『群書類聚第十輯 続詞花和歌集』、96頁。
- 59) 『醍醐雑事記』の脚注には（大僧都）定海とな
っているが、元海と思われる。
- 60) 中島俊司編纂（1931）：『醍醐雑事記』醍醐
寺、291-292頁。
- 61) 前掲9)。
- 62) 新編国歌大観4 巻2守覚、13頁、122に
和歌のみ掲載。
- 63) 東大史料編纂所古記録フルテキストデー
タベース『碧山日録』、0033.tif。
- 64) 前掲22)、276頁。
- 65) 前掲36)。
- 66) 前掲37)。
- 67) 山田智旭（1991）：『本朝廬山旭蓮社—今と
昔—』、16頁。
- 68) 渋谷一成（2013）：堺市博物館研究報告第
32号、54-60頁。
- 69) 『多聞院日記 第三巻』（三教書院 1936）、
223頁。
- 70) 秋里籬島（1796）：国会DC『和泉名所図絵
4巻』、45-48コマ。
- 71) 三浦周行監修（1929）：『堺市史』第一巻
162-163頁。
- 72) 富山県（1909）：『富山県写真帳』、55頁。
- 73) 京都府曼殊院蔵。慶応義塾大学メディアセ
ンター DC是害坊絵巻8コマ。
- 74) 東大史料編纂所編纂（1953）：『大日本古記
録 蔗軒日録 季弘』（岩波書店）、63頁、
138頁。
- 75) 大阪歴史博物館蔵。

スイスアルプスにおける休暇旅行の進展と最古の温泉療養ホテル Progress of Vacation Trips and the oldest Spa Hotel in the Swiss Alps

池永 正人*
Masahito IKENAGA

キーワード：休暇旅行 (vacation trips) ・温泉療養ホテル (spa hotel) ・
スイスアルプス (Swiss Alps) ・バート・タラスプ (Bad Tarasp)

1 はじめに

19世紀中頃以降のヨーロッパ諸国における近代の旅行形態は、工業化社会の休暇概念に基づいている。19世紀前半の技術革新による経済発展と自由主義の潮流は、新しい中産階級の企業家層による巨大資本の集積を招いた。このような企業家は交通体系、とりわけ鉄道建設と汽船運航の拡充を独自の方法で支援した。イギリスでは早くも1830年代から40年代において拡充された鉄道路線は、物資と労働力を効率良く輸送した初めての交通体系整備であった。それに加えて鉄道は、大勢の人々を日常生活から快適な場所と時間へと迅速に逃れるために優遇された交通手段であった。多くの時間と金額を費やす貴族の長期旅行形態は、政治的・社会的変革によって中産階級の市民に広がっていった。そし

て、この100年間に人里離れた上品な夏季居宅で過ごす休暇が形づくられ、20世紀まで上流階級の休暇の理想像であった。

このように19世紀の交通体系の整備は、大勢の人を遠くの場所へ比較的短時間に輸送できるようになり、日常生活が休暇によって中断されることを初めて可能にした。この社会現象は旅行の大衆化と同時に出現し、現在もスイスのアルプス地方に見られる宮殿様式の豪華なホテルの佇まいから窺い知ることができる。それらの中には、ロイカーバート (Leukerbad)、リギカルトバート (Rigikaltbad)、バートラガーツ (Bad Ragaz)、サンモリッツ (St. Moritz)、シュクオール (Scuol) などのように、温泉療養所から豪華ホテルに改築して温泉療養地を形成したところもある (図1)。現在これらの温泉療養地は、

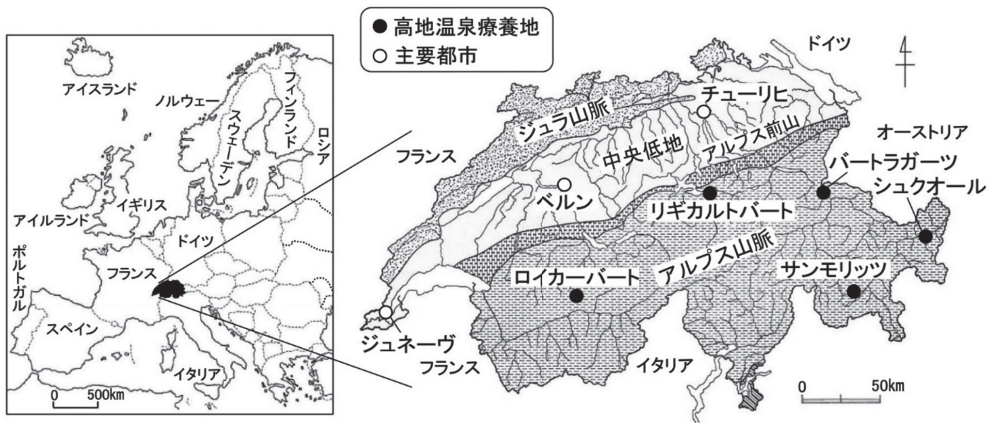


図1 スイスアルプスの温泉療養地
(注) 筆者作成。

*長崎国際大学 (Nagasaki International University)

各種スポーツ施設、大規模な商業施設や国際会議場・展示場、博物館・美術館・映画館・劇場などの多様な文化施設、遊園地・公園やカジノなど娯楽施設を整えた統合型リゾート(Integrated Resort、略称IR)に発展している。

スイスアルプスにおける19世紀中頃以降の観光発展に関する主な研究成果については、サミュエル・グイアー(Samuel Guyer)¹⁾が、スイスのホテル業界と旅行者について明らかにしている。また、アルトゥル・シェーリー(Arthur Schärli)²⁾は、スイス中央部のベルナーオーバーラント地方(Berner Oberland)の山岳リゾートホテルの宿帳を分析して、19世紀の客層と観光行動を論述している。一方、1860年以降のスイス東部のオーバーエンガディーン地方(Oberengadin)におけるホテル建築の歴史については、イザベレ・ルッキー(Isabelle Rucki)³⁾の研究成果がある。

本稿は、これらの文献を分析してスイスアルプスにおける休暇旅行の進展と、それを背景とするスイス最古のタラス温泉療養ホテルの歴史の変遷を明らかにするものである。

なお、文献の記述内容を検証するため2016年8月、2017年12月、2019年12月に現地調査を実施した。

2 スイスアルプスの休暇旅行の進展

(1) 休暇旅行の始まり

19世紀のスイスのホテル研究者サミュエル・グイアーは、1874年の著書『現代ホテルの本質』(初版)⁴⁾の中で、ヨーロッパ諸国の社会的・経済的変革にともなう人々の旅行形態の変化を次のように述べている。

「19世紀中頃のスイスでは、大勢の人の移動は徒歩のみであったが、平地においてはどこでもいつでも郵便馬車に乗車した旅行者がいた。とりわけ裕福な家族は、個人所有の馬車を利用して気に入った場所を繰り返し訪

れ、満足のゆくまで旅行を楽しんだ。このような旅行の楽しみは、現在よりも大きかったことは否めない。それは、旅行によって地方の自然や人々の暮らしが明確になるとともに、地方の風景美に感銘した旅行者が旅行体験を持続させたからである。しかし、それは多くの時間と資金を有する人たちであり、その場合は誰もが好んで旅行ができ、いつでも最善の意志は幸運と見なされて時間とお金を惜しげもなく自由に使えた。そして、最大の関心事は客を迎い入れる側に変化が生じて誰もが様々な旅行ができようになり、大衆の旅行需要が増加していったことである。不健全で熱狂的な麻薬吸引者や裕福で享楽の狩猟者は、疲労した職場から一時的に離れて新鮮な水や空気に接し、緑豊かな森林や牧草地の美しい自然環境に身を置くことで心身を最良な状態に整えた。」

工業化社会の恩恵によって特権を与えられた上流階級の市民は、旅行の特権も手に入れた。そのような階級市民は工業化社会の進展により膨大な数となり、当時の貴族階級よりも裕福になって休暇旅行に出かける者が増加した。

休暇旅行に関して説得力のある資料は宿泊客の宿帳であり、19世紀中頃以降の主要な療養地のホテルでは、宿泊客を明記する規準に則った運営がなされていた。宿帳には宿泊客の氏名や国籍が記載されていたが、滞在の目的あるいは期間の明記を欠いていた。爵位を有する人は、大抵はその称号を名前に付け加えている。たとえば、1860年のインターラーケン(Interlaken)にあったホテルの宿帳には、ベルリンのリグニッツ侯爵夫人(Die Frau Fürstin von Lignitz, Berlin)、イングランドのパーズ伯爵、メルフォート公爵(The Earl of Perth, Duc de Melfort et suite, Angleterre)、シュトゥットガルトのパロン・フォン・ガルスベルク男爵(Baron von Galsberg, Stuttgart)などから明白で

ある⁵⁾。

(2) 休暇旅行の大衆化

1950年代以降のスイス観光の歴史に関する様々な研究分野における統計調査結果から、1850年～1914年の65年間の宿帳には、約半数の宿泊客の職業が明記されておらず、貴族階級は全体の1～3%に過ぎない。このことは、宿泊客の大部分を占める中産階級が自身の社会的地位を公衆に秘匿したことによるものであると解釈されている⁶⁾。このような宿帳は、19世紀後半から20世紀初頭の旅行者の社会的地位と社会情勢を知る貴重な資料として活用された。

宿帳から読み取れることは、休暇を過ごす大部分の宿泊客が企業家、事業所幹部、国家公務員、商人、大学教授、医者、法律家のような産業・経済界の富裕層と教養のある市民階級で構成されていたことである。ただし、パン屋、肉屋、音楽家などの職業記名は、この時代の旅行者が貴族や中産階級の富裕層のみならず、一般市民の多様な職業階層の人々も宿泊していたことを物語っている。しかも宿泊客のほとんどは外国や国内中央低地からの訪問であった。

トーマス・クック (Thomas Cook) は、1855年に初めてイギリスの旅行団体をヨーロッパ大陸に案内し、組織化した団体旅行の創設者として知られ、17世紀と18世紀の貴族あるいは富裕な中産階級の教養旅行のモデル企画を実施した。それは、主に中低程度の所得者層からなる旅行参加者を一同にして、富裕階級によって伝統的に証明された名所、行楽地、療養地に案内するものであった。1863年にトーマス・クックは、設定した訪問地で構成する旅行商品を造成して、スイスへの自身による最初の団体旅行を催行した。このスイス旅行に参加した男女の2冊の日記、「ジェマイマのスイス日誌—スイスの最初の案内旅行(1863年)」⁷⁾と「スイス旅行—ソールズベリー居住のアルフレット・ミルの日記(1865年)」⁸⁾には、元気なカップルの

絵が描かれており、それから旅程の情景が読み取れる。

クックの団体旅行は、短期間で比較的安価な一括料金の団体料金に基づいて催行された。この新たな旅行形態は、富裕層の長期間続く休暇旅行とは異なり、参加者の多くが初めて経験する旅行であり、しかも数日間で広範囲を巡るものであった。団体旅行者が一晩のみ滞在するいくつかの療養地の宿帳には、国王、王女、男爵など皇族・貴族と並んで団体客の名前が明記されていた。しかし、19世紀の旅行書と宿帳には、これらの団体客の旅行の経路と動機に関しては表記されていない。そうした中、グイアーは旅行の動機のキーワードを提示している。彼は初期の旅行・ホテル史の研究者として、当時の人がどのような動機で旅行に出かけたかを詳細に調べて、旅行者をビジネス客、療養客、行楽客の3つに分類している⁹⁾。

3 スイスアルプス最古の温泉療養ホテル

(1) タラスプ温泉療養ホテルの建設

スイス東部のエンガディーン地方のバート・タラスプ(Bad Tarasp)とサンモリッツ・バート(St.Moritz Bad)では、1860年～1864年の間に大規模なホテル建設が行われ、それらはスイスアルプスで最初の温泉入浴施設を備えたホテルであった¹⁰⁾。

バート・タラスプでは、それまでイン(Inn)川岸辺には宿泊施設が無く、源泉を囲った鉱泉水飲み場が唯一設置されていたにすぎない。この簡易な飲泉所の設置は、タラスプ村の厳格な建築規定によって建築物における治療行為としての鉱泉水提供を妨げていたことによる。1860年に株式会社方式の療養施設が建設されることになり、この会社はシュクオール村、タラスプ村との間に土地および鉱泉の利用に関する契約を結び、それにとまなう既存の建築規定が改訂された。新たな建築規定によって、上記の温泉入浴施設を備えた大規模ホテル建設が可能になったので

ある。

パート・タラスプの鉱泉は、イン川下流方向の左岸の狭くて細長い土地ナイアース(Nairs)に源泉がある。これに対して右岸は森に覆われた急斜面の地形である。つまりイン川左岸のこの場所だけが、療養施設建築の条件にかなった十分な広さの日向平坦地であった。

1861年に、ザンクト・ガレン(St. Gallen)の建築家フェリックス・ヴィルヘルム・クプリー(Felix Wilhelm Kubly)は、風が弱く周囲を森林に覆われた河谷低地のこの場所が療養の適地と考え、マイエンフェルト(Maienfeld)村の技師モース・フォン・ウリセス・グーゲルベルクの協力を得て、地形に合わせた弓形の南向き4階建て構造の温泉療養ホテルを設計・建築した。また、広い庭園をめぐる別邸が併設され、このホテルに向かうための木造の連絡橋がイン川に架設された。翌1862年には、橋の袂の左岸に機械小屋、右岸に源泉施設カローラ(Carola-Gebäude)の2棟が造られた¹¹⁾(図2、写真1)。ちなみに、カローラの名称はタラスプ来訪女性のザクセン王国女王カローラ(Carola von Sachsen、在位1873～1902年、現在のドイツ・ザクセン州)の名に由来する。カローラ女王は病院、療養所、児童福祉施設等を整備する社会福祉事業に尽力した人物であった。同年、ナイアースからヴルペラ(Vulpera)集落へ通じる道路の建設、カローラ源泉に隣接した市場、理髪店、薬局などの商業施設、イギリス国教会の礼拝堂や発電所の宿舎などが旅人の宿泊所として提供された¹²⁾。

そして、1864年7月26日に2年の歳月を経てベッド数300台、高さ18m、長さ150mのタラスプ温泉療養ホテル(Hotels Kurhaus Tarasp)が開業したのである(図3)。このホテルの設計図は、後に多数の傑出したホテル建造物の手本として役立つことになる。たとえば、バルトハウス・ヴルペラ(Waldhaus Vulpera:1897年にエルター・ニコラウス・

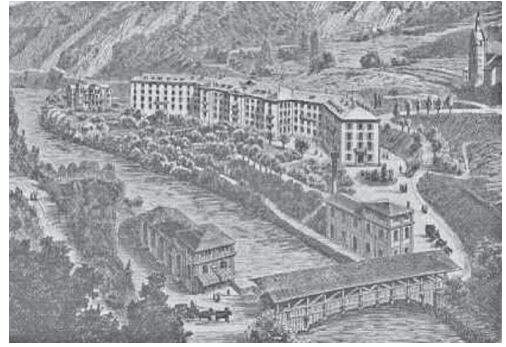


図2 タラスプ温泉療養ホテルの鳥瞰図
(1880年代)

注) Die Schweizerischen Holzbrü (Kurhaus Tarasp) より引用。屋根付木橋の袂の建物: 左側はカローラ源泉、右側は機械小屋。図の右上はイギリス国教会の塔。



写真1 タラスプ温泉療養ホテルの遠景
(1900年頃)

(注) Isabelle Rucki, "Das Hotel in den Alpen", 94頁より引用。

ハルトマン)、シュヴァツァーフ・ヴルペラ(Schweizerhof Vulpera:1900年にカール・コラー)、バルトハウス・シルス(Waldhaus Sils:1905年にカール・コラー)などである。

1876年にビュヴェッタ飲泉所(Trinkhalle Büvetta)が、タラスプ温泉療養ホテルの近くに開設された。翌1877年にタラスプを訪れたドイツ人作家ベルトホルト・アウアーバッハ(Berthold Auerbach、1812～1882年)は、タラスプ在住の温泉療法医エドゥアルト・キリアス(Eduard Killias)から温泉療養の効能に関する知識を得て著述し、それが温泉療養効能の啓蒙書となる。

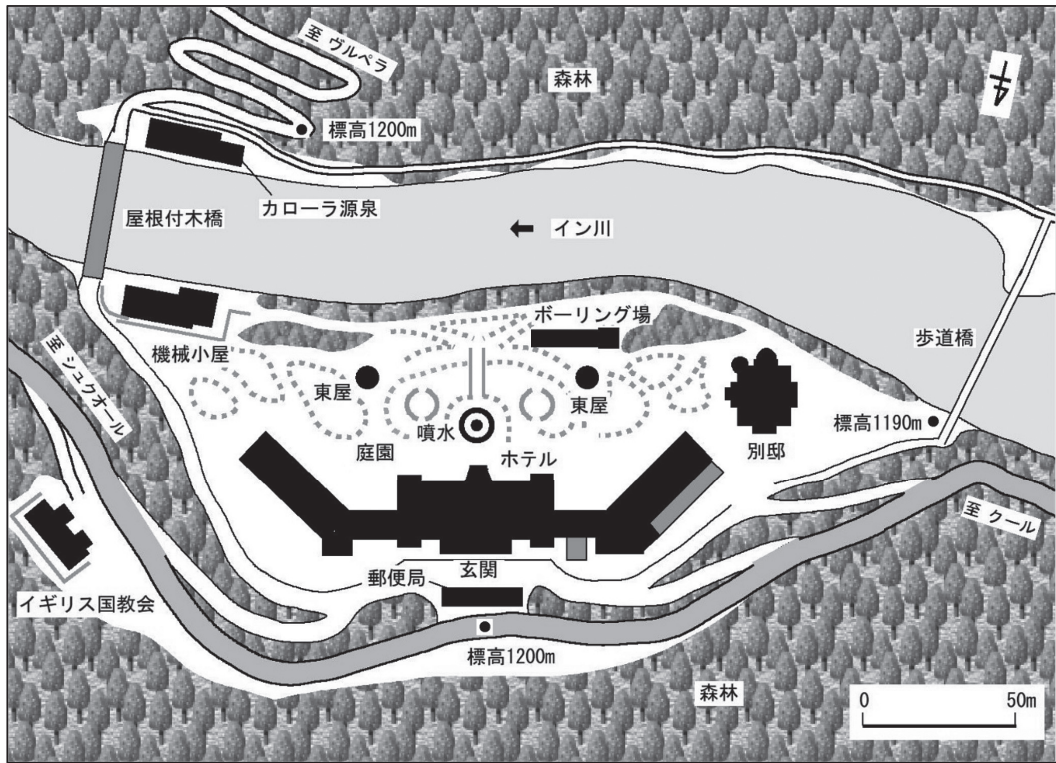


図3 タラスプ温泉療養ホテルの立地図(1898年)

(注) 筆者作成。

開業22年後の1886年にタラスプ温泉療養ホテルの照明が電化された。これは、サンモリッツのクウムホテル(Kulm Hotel St. Moritz)にスイスで初めて電灯が導入された8年後のことであるが、当時の電気工学の中央雑誌には、以下に示す記事で報告された。

「エンガディー地方のタラスプ。この療養所は、およそ500個の白熱電球と12個のアーク灯(探照灯)の電気照明器具を備えた。この設備は著名な電気技師メーリンク(Möhring)が仕上げたものであり、かなり良好に機能した。とりわけ、メーリンクの最新の発明品であるアーク灯のブーエ(Buhe)は、すべての療養客をとりこにした。この灯りは120ボルトの電圧に適した抵抗器の直列抵抗で照明する。タラスプは、とても多くて数え切れないほどの馬力を備えることができる好都合の立地条件にあり、それゆえにエネ

ルギーに関しては問題なかった。」

また、1901年に医師ヴォゲルサンク(A Vogelsang)が『タラスプ療養所とウルペラの大型ホテルの電灯照明、シュクオールにおけるこの設備の稼働』を著述している。当時のエンガディー地方における温泉事業の歴史に関しては、ヤコブ・ベルニシュが1887年に著述した『タラスプ療養施設とその療養(ヨーロッパの壁画132/133巻)』、エルンスト・ブサーが1954年に発表した論文「ウンターエンガディーにおける温泉事業の発展」、ルッキーの1981年著述『グラウビュンデン州のホテル目録』が参考になる¹³⁾。

(2) タラスプ温泉療養ホテルの構造

タラスプ温泉療養ホテルの両側の翼棟は、135度の緩い角度で幅広い中央棟に連結しており、中央棟は北側にホテルの玄関、南側には河岸まで広がる庭園の入口が設けられた

(図4)。このようにホテルは、限られた建築面積に自然の採光を最大限に利用できるように設計された。中央棟の客室は、階級制度の秩序による個人談話室10部屋、大小28部屋が設計されている。これに対して翼棟には比較的小さな同じ仕様の32部屋が連続して設けられている。

建物構造の詳細は、庭園階は専用室が利用できるように設計されている。食事と温泉入浴(湯治)のような健康に関する設備は、東西の翼棟に設けられている。東側翼棟の庭園に面した庭園階には32箇所の浴室と療養室がある。電気モーターがなかった時代は、蒸気ポンプでカローラ源泉から鉱泉水を引いて温めたスチーム風呂が採用された。

標高1189mのカローラ源泉からは、現在も泉温7.7°C、pH6.47の鉄・炭酸ガスを含

む酸性の鉱泉水が湧出している。主成分はナトリウムNa⁺: 1030mg/l、カリウムK⁺: 56mg/l、カルシウムCa²⁺: 515mg/l、マグネシウムMg²⁺: 112mg/l、塩化物Cl⁻: 551mg/l、炭酸水素HCO₃⁻: 3090mg/l、硫酸塩SO₄²⁻: 599mg/lである¹⁴⁾。このため、鉱泉水は飲泉療養にも利用されてきた。

宿泊客が快適に滞在するための設備としては、リフト(昇降機)、バルコニー、テラス、ベランダ、ビリヤード室、演奏室、喫茶室、医務室、女性室が整備されており、現在の観光ホテルの基本構造が整っていたことが見て取れる。

これに対して西側翼棟は庭園階に調理場とレストラン、その上方1階と2階に各々広い食堂(写真2)が設けられている。クプリーは、翼棟の庭園階を営業活動の部分として位置づ

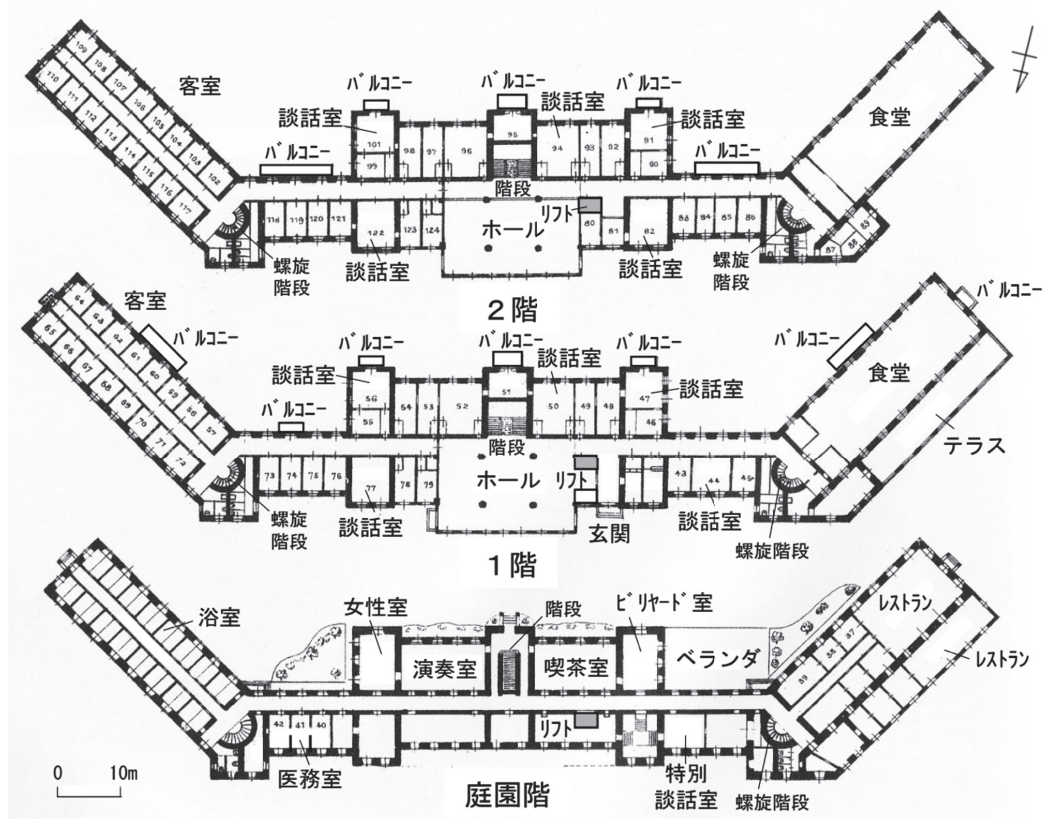


図4 タラスブ温泉療養ホテルの見取図(1864年開業時)
(注) Isabelle Rucki, "Das Hotel in den Alpen", 96頁の原図を筆者和訳。

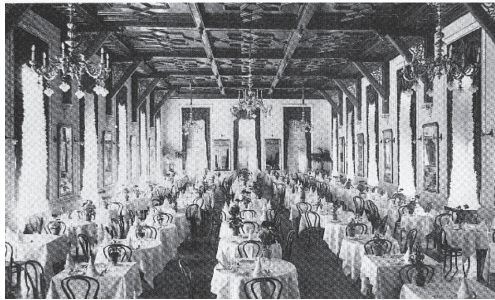


写真2 タラスプ温泉療養ホテルの食堂
(1900年頃)

(注) Isabelle Rucki, “Das Hotel in den Alpen”,
97頁より引用。写真上：2階、写真下：1階。

けた。それは、客室利用者に対して調理場や療養室からの臭いや騒音の被害を防ぐためである。

このことは、1階のロビーや集会広間の公共部分並びに客室や談話室の個人部門が中央棟に集結している由縁である。中央棟の1階にはエントランスホールと中央階段があり、2つの左右対称に配置された両脇の螺旋階段が翼棟の屈曲した連結部分に設けられ、療養室と食堂への通路につながっている。このように1階と2階に食堂および共用談話室を配置することによって、エントランスホールの自然採光と換気を可能にした。

(3) 温泉療養ホテルから一流ホテルへの変貌

：グランドホテル・シュクオールパレス

1864年の開業以来、ヨーロッパの高級療養ホテルとして営業を続けてきたタラスプ温泉療養ホテルは、1990年にクレムギア・タラスプ株式会社 (Clemgia Tarasp AG) に550万スイスフラン (1990年1CHF=100JPY、

5億5000万円) で売却されることになった。クレムギア・タラスプは、シュクオールパレス (Scuol Palace) にホテル名を改めて116室を有するクラブハウスとして経営を始め、ロビンソンクラブの観光客に利用された。しかし、16年後の2006年にはフリードマン有限公司 (Friedmann GmbH) に売却されている。この会社はユダヤ人のフリードマンが、120室230ベッドを備えたシュクオールパレスをヨーロッパ最大のコーシャルホテル (ユダヤ人ホテル) として営業を再開し、イスラエルとアメリカ合衆国からのユダヤ教徒が多く滞在するようになった。イスラエル人は夏の快適なスイスの気候を好み、宗教的義務を怠ることなく休暇を過ごせる宗教的施設と食事が提供できるホテルに滞在する。シュクオールパレスにはユダヤ教の会堂 (シナゴーク、synagogue)、ユダヤ人の儀式風呂ミクワー (mikveh)、図書館が整っている。

2010年に従業員宿舎が火災に見舞われると、同年ホテルを閉鎖するなど経営がうまくいかず、2013年にアメリカ合衆国の投資会社に売却された。同会社は、少なくとも客室の40%をセカンドハウスとして利用できるように、翌2014年夏にホテルの改修工事に着手した。そして、2019年にグランドホテル・シュクオールパレス (Grandhotel Scuol Palace) の名称でスイスの一流ホテルとして再開したのである。

4 むすび

本稿は、スイスアルプスにおける休暇旅行の進展と、それを背景とするスイス最古のタラスプ温泉療養ホテルの歴史の変遷を明らかにした。

スイスアルプスの休暇旅行の進展は、ヨーロッパ諸国の工業化社会の形成によって疲労した都市住民が、職場から一時的に離れてアルプス地方の新鮮な水や空気に接し、緑豊かな森林や牧草地の美しい自然環境に身を置くことで心身の体調を整えたことにある。それ

を可能にしたのが鉄道交通の発達であり、鉄道は「ヒト・モノ・カネ」の移動を迅速で広範囲にした。世界で初めて宿泊・交通費の一括料金で短期間の団体旅行を企画・催行したイギリス人のトーマス・クックは、1863年にスイスへの最初の団体旅行を催行した。19世紀後半から20世紀初頭のスイスで休暇を過ごす宿泊客の多くは、企業家、国家公務員、商人、大学教授、医者、法律家など富裕層の市民階級であった。

スイスアルプス最古のタラスプ温泉療養ホテルは、1864年の開業以来社会情勢の変化に対応しながら高級温泉療養ホテルとして営業を継続してきた。標高1200mのイン川左岸に立地するこのホテルは、周辺の地中から湧出する鉄・炭酸ガスを含む酸性の鉱泉水をスチーム風呂、飲泉の方法で温泉療養に利用してきた。快適に滞在するための設備として、豪華な食堂や良質な客室、浴室・医務室・演奏室・喫茶室などが整えられ、現在の観光ホテルの基本構造を形成していたといえる。

以上の研究結果から、スイスアルプスの温泉療養地の成り立ちを概略把握できる。

注・参考文献

- 1) Samuel Guyer (1885) : Das Hotelwesen der Gegenwart, Zürich 2. Aufl. [1. Aufl. 1874].
- 2) Arthur Schärli (1984) : Höhepunkte des schweizerischen Tourismus in der Zeit der "Belle Epoque" unter besonderer Berücksichtigung des Berner Oberlandes [Diss. (博士論文)], Bern, Beilage 11 (付録11), S.238.
- 3) Isabelle Rucki (2012) : Das Hotel in den Alpen – Die Geschichte der Oberengadiner Hotelarchitektur ab 1860, hier + jetzt, 320 S.
- 4) 前掲1) 19頁。
- 5) 前掲2) 22頁。
- 6) 前掲2) 22頁。
- 7) Miss Jemima's Swiss Journal (1863) : The First Conducted Tour of Swizerland,

London.

- 8) Georg Luck [Hg.] (1982) : Eine Schweizer Reise. Das Tagebuch des Alfred Miell aus Salisbury [1865], Bern/Stuttgart.
- 9) 前掲1) 23頁。
- 10) Schubiger Kubly (1984) : Zu Leben und Werk der wichtigsten Hotelarchitekten im Engadin siehe auch das Kapitel «Die Architekten», S. 171-183.
- 11) Wemer Minder, Die Schweizerischen Holzbrücken, <http://www.swiss-timber-bridges.ch> (2022年3月21日閲覧)
- 12) Jakob Pernisch (1981) : Das Kurhaus Tarasp und seine Umgehungen [Europäische Wanderbilder Bd. 132/133], Zürich [1887]; Ernst R. Buser: Zur Entwicklung des Badewesens im Unterengadin [Diss.], Basel 1954; Rucki, Hotelinventar Garaubünden.
- 13) 前掲3) 93頁。
- 14) Johannes Studer (2022) : Inhaltsstoffe der Mineralquellen von Scuol Proben 2019.

温泉地ウェルネスツーリズムとしての 豊後高田「海風タラソテラピー」の事例研究

The Case Study of Umikaze (Sea Breeze) Thalassotherapy in Bungotakada
as Wellness Tourism in Hot Springs Area

ジュアンドヤスコ* 斉藤 雅樹**
Yasuko JOUANDEAU Masaki SAITO

キーワード：ウェルネスツーリズム (wellness tourism) ・タラソテラピー (thalassotherapy) ・
豊後高田 (Bungotakada) ・女性目線 (from a female perspective)

1 はじめに

大分県豊後高田市における温泉、海洋などの自然環境、食文化や歴史など観光資源を活用したウェルネスツーリズムを社会実装する取り組みについて紹介する。

当地は人口2万人余の小都市であり、雑誌の「住みたい田舎ベストランキング」で全部門1位になった実績を持つ¹⁾。市内には開湯640年の真玉温泉など6つの温泉があり、単純温泉、塩化物泉、炭酸水素塩泉、硫酸塩泉、二酸化炭素泉と泉質も多様である。「くにさき六郷温泉」と名付けてPRされ、環境省「新・湯治」効果測定調査に初年度から参加するなど温泉地振興に近年は注力されつつある²⁾。

観光資源として、レトロタウンの「昭和の町」、開山1,300年の六郷満山の寺社が数多くあり、その一つとして長崎鼻エリアがある。2007年より地元住民の有志を中心に、耕作放棄地にひまわりの作付けを開始し、夏季にはひまわり160万本が、春季には菜の花2,200万本が開花する「花の岬」として知られる。海水浴場やキャンプ場などがある自然公園であったが、花の時期や海開きシーズン以外は観光客が少なく、豊かで美しい自然環境を活用しきれていなかった。

そこで、豊後高田市のウェルネスツーリズム振興を目的に、長崎鼻エリアを清潔・安

全・快適な海水浴場「パーフェクトビーチ」とし、周辺の温泉など観光資源とともに総合的に活用する事業が2016年度から開始された³⁾。国の地方創生プログラムを活用し、豊後高田市が中心となり、東海大学、SPALOHAS倶楽部などと共同事業として実施された(図1)。

「パーフェクトビーチ構想」では、ウェルネスツーリズムの核として、フランスで人気のウェルネスツーリズムの拠点である「タラソテラピー」のノウハウを日本型に変換した「海風タラソテラピー」を取り入れた。関連事業を含めたおよそ5年間の事業実施の結果、長崎鼻を中心とするエリアの一連の取り組みが評価され、2021年度には国土交通省「地域づくり表彰審査会特別賞」⁴⁾、および内閣府(恋人の聖地)第2回地域活性化大賞「観光庁長官賞」⁵⁾を受賞するに至った。

いわゆる“ハコモノ”のようなハードウェア面に頼らず、日本では比較的弱いとされているソフトウェア面の振興に焦点を当て、全国の温泉地における今後の「ウェルネスツーリズム」の在り方を考察する。なお、ウェルネスツーリズムの類義語として「ヘルスツーリズム」があり、ウェルネスツーリズムとメディカルツーリズムを合わせた上位概念であると定義される場合がある⁶⁾。本稿で紹介す

* SPALOHAS倶楽部/日仏温泉・タラソテラピー・文化振興会 (General Incorporative Association SPALOHAS / Club Promotion pour le Thermalisme, Thalassothérapie et la Culture Franco-Japonais)

** 東海大学 (Tokai University)

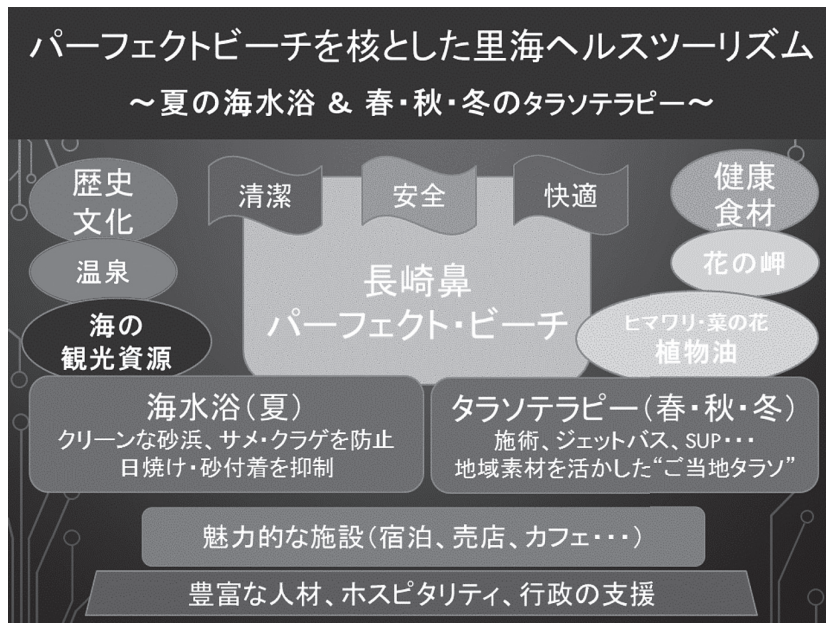


図1 パーフェクトビーチを核とした里海ヘルスツーリズムの概念図(筆者作成)

る取組みにおいては現在のところ医療的な側面は乏しいため、この定義に基づいて「ウェルネスツーリズム」に統一して述べるが、豊後高田市の事業名など固有名詞の場合や文献からの引用においては「ヘルスツーリズム」と記載することを了承されたい。

2 豊後高田市の観光振興の取組み

豊後高田市は国東半島北西部に位置し、神仏習合発祥とされる宇佐神宮の影響から独特の「六郷満山文化」が栄え、山と海と自然に囲まれた美しい景観に恵まれている。

これまで同市の観光振興は山側が主体であった。国宝の富貴寺をはじめ、平安時代の水田の形が残ることから国の重要文化的景観に選定され、UNESCO 未来遺産や世界農業遺産に登録された農林水産循環の代表的な場所である田染荘(たしぶのしょう)、市の中心部にあって昭和30年代の風情を残す「昭和の町」などが観光のいわばメイン・コンテンツであり、日帰り客が多い特徴がある。

これに対し、海側の観光振興の取組みも行

われている。例えば、「昭和の町」を起点としてリアス式海岸線が続く国道213号線を海沿いに進み、「日本の夕陽百選」の一つである「真玉海岸」、「縁結びの神様」を祀る「粟島社」、九州有数の「花の岬」である「長崎鼻」のリゾートキャンプ場までの海辺の約20kmのルートは、2013年に「恋が叶う道=恋叶(こいかな)ロード」と命名された。2016年1月にNPO法人地域活性化支援センターにより「恋人の聖地」に選定された。

しかし、この美しいドライブコースには観光客にとって魅力的なカフェやアクティビティに乏しかった。春の菜の花と夏のみまわりの時期こそ道路が渋滞するほどの見物客が訪れるものの、花を見て通り過ぎる場合が多いために収益が上らず地域振興効果は限定的であった。長崎鼻エリアをはじめ、ポテンシャルを有する豊後高田市の「海」の観光資源をどう活用するかは、当地にとっては長年の課題であった。

3 「パーフェクトビーチ・里海ヘルスツーリズム」事業の開始

上記の経緯から、「地方創生」と「ウェルネスツーリズム」を視野に入れた「パーフェクトビーチ・里海ヘルスツーリズム」事業が2016年度に開始された。筆者（齊藤）が当時所属していた東海大学海洋学部への委託事業として、清潔・安全・快適な海水浴場を「パーフェクトビーチ」と命名し、その実現とそれを核として周辺の温泉など観光資源を活用するウェルネスツーリズムを当地に総合的に構築する試みである。

その中心的な取組みとして、フランスで人気のウェルネスツーリズムのコンテンツである「タラソセラピー」のノウハウを取り入れ、「ハコモノ」に頼らないソフトウェア面の構築を筆者（ジュアンド）が総監修し、一般社団法人日仏温泉・タラソセラピー・文化振興会 SPALOHAS 倶楽部への市からの委託事業として開始された。

4 フランスの温泉療養およびタラソセラピーの概要と日本型へのカスタマイズ

フランスの温泉は健康保険が適用される温泉療養が基本で、西洋医学のようにあらゆる病症の完治・改善を目指すというより、ある種の病症に限定してQOLの向上や減薬、正確な情報提供、メンタル・サポート、生活習慣の改善に重点を置いている。健康保険が適用されるため、当然「Evidence-Based Medicine」（科学的な根拠に基づく医療）を進め、結果を温泉地で具現化し、フランス人が健康保険を利用しながら享受している。

これに対して、日本の温泉には「健康増進施設」や「温泉病院」はあるものの、根本的な相違として温泉療養に健康保険制度の適用がないため、一概にフランスの温泉療養事情との比較は困難である。そこで、いったん「温泉」や「タラソセラピー」の効能面の議論はさておき、温泉地もタラソセラピーの場も共通して実施しているサービス面に注目すること

とする。

一般に、フランスにおいては「健康的な食事」、「帰宅後も継続できる適度な運動」、「温泉や海水を活用した徹底したリラクゼーションの提供が挙げられる。これらは日本でもよく知られる「生活習慣病予防の三大原則」だ。

加えて、フランスでは「温泉」も「タラソセラピー」も「自然療法」であり、化学合成品ではない地元のオーガニックなハチミツや植物からリラクゼーション用の商品を作り、地域の特性を感じさせるソフィスティケートされた工夫もみられる。

筆者の提唱する「海風タラソセラピー」では、この「生活習慣病予防三大原則」に沿い、地元の特産と地域性を最大限に引き出すかたちで商品化を目指してきた。“日本型”にカスタマイズし、豊後高田エリアの特質に合わせた形式を意識し、本プロジェクトにて実現したものを以下にいくつか例示する。

●小さく囲われた人工のビーチを活かした楽しい運動

(1) ハワイ発祥で日本でも人気のSUPクルーズとSUPヨガを開始。

(2) 「住む人も来る人も健康になる」をモットーとして、地元のスニア世代の住民向けに「サンドウォーク」を実施。市民6人で始め、翌年30人以上が参加して「坐骨神経痛が気にならなくなった」「週に一度みんなに会えるのが楽しい」など評価を得た。コロナ禍で中止するも、収束後自主的に市と連携し再開する仕組みまで完成。

(3) 真玉海岸の干潟に夕陽が沈む特別な日のみ「MATAMA サンセットヨガ」を実施（写真1）。事業当初から、ヨガ講師と集客法を相談して、近隣の市から人気ヨガ講師等とのコラボレーションを図った。



写真1 MATAMA サンセットヨガ(筆者撮影)

●地元の特色を活かしたオーガニックなリラクゼーション

良質のオーガニックオイルと精油による施術「ウェルカムトリートメント」を構築(写真2)。施術を行うために地元の女性有志を募り、ゼロから施術を習得してもらった。

リラクゼーションから「ハンド事業」も展開。ワンコイン(500円)ハンド・トリートメント(写真3)を地元のホテルとコラ

ボレーションし、バスツアーを開催。初詣、菜の花とひまわりの時期のみ年間約40日の開催で、2,200人以上が体験。同じオイルと精油による手作りリップクリームも実施し、年間約40日で140万円の売上げとなった。「海風タラソテラピー」のみの事業予算は5年間で1,350万円。3年目に既に事業費の1割以上の収益を生み出し、地元住民やホテルに還元した。



写真2 ウェルカムトリートメント



写真3 ワンコインハンド・トリートメント

(いずれも筆者撮影)

●地元の特産食材を活用したメニューの開発と提供

地元の特産である長命草と落花生を使った「ファラフェルランチ」(ひよこ豆のハンバーグとサラダ)を考案(写真4)。参加女性陣により長命草ブレッドと大豆ミートカレーを考案(写真5)。

これらの「適度な運動」、「ヘルシーな食事」、「オーガニックなリラクゼーション」の3つを組み合わせ「夏プラン」を税込

9,800円で提供。「冬プラン」は「適度な運動」を、屋内「フェイシャルヨガ」に変え、「ヘルシーな食事」、「オーガニックなリラクゼーション」の3つを組み合わせ、9,800円の商品化に至った。

フェイシャルヨガは、コロナ禍マスク生活が長く、介護関係のお客様から大分市内で同僚向けに実施を依頼されるなど広がりをみせている。



写真4 ベジタリアンファラフェルランチ(筆者撮影)



写真5 ベジタリアンカレー(筆者撮影)



写真6 シニア住民向けサンドウォーク(筆者撮影)

これらの波及効果として、「サンドウォーク」指導者が、地元関係者の信頼を得て、地域の「健康づくり」指導にもあたっている(写真6)。

また、豊後高田市教育委員会の目に留まり、成人の日の体験プレゼントとして、「海風タラソテラピー」のSUPクルーズやSUPヨガ、リラクゼーションなどが選ばれ、事業に参加している地元女性陣と未来に羽ばたく若者を繋ぐ形となった。

5 考察

(1) 温泉とウェルネスの観点

古くから日本には「湯治」の文化があり、温泉に浸かり地元の新鮮な食材を食べて、滞在中に知り合った人たちとの交流を楽しんだ。これら「温泉」「新鮮な地元の食材」「人との交流」の3点は、実はまさしく現在のフランスの温泉地やタラソテラピーの場で当たり前に行われ、加えて「適度な運動」、「地域観光」、「環境整備」も進み、地域の特色を打ち出した魅力的な「ウェルネスツーリズム」

が完成している。

日本には27,000強の源泉があり⁷⁾、時に強烈な泉質に出会うと、何も考えずただひたすら温泉に浸かり、自然の恵みを堪能できる。こうした、温泉の湯の魅力に根ざした温泉地こそが温泉利用の本質である、と主張する向きもあろう。しかし、そうしたいわば「泉質のみで勝負できる」温泉地は国内全体にどれほど存在するであろうか。

近年の日本人がイメージする「温泉旅行」は様々であるし、日帰りや一泊の短期間で、カロリーなど気にせずに美味しい料理と酒類に舌鼓を打つような温泉の楽しみ方を決して否定することはできず、むしろ日本の伝統的なリラックス法として継続するべきであろう。

しかし、どのような泉質であっても、多面的なウェルネスの要素を地域の特色を活かしながら巧みに組み合わせ、市場のニーズに対応することを優先させ、温泉地の仕組みを構築しなければ、進化と変化はもとより生き残りさえも難しいと考えられる。世界的にも高

齢化が進み、特に長寿国である日本においては、温泉や海を活用した地域経済の活性化や、「最期まで元気で」生活するための仕組みづくりの実現が待たれている。1976年頃より日本政府は健康保険が適用されるヨーロッパの温泉やタラソテラピー視察に有識者を送り、模索を続けてきたが、いまだ“道半ば”の感がある。

このような状況の中で、豊後高田市において実施された「パーフェクトビーチ・里海ヘルスツーリズム」事業と、筆者らの「海風タラソテラピー」の取り組みは、当地にある観光資源、温泉資源を活用し、地域の特性と利用者のニーズに沿うことを最大限に意識したものである。

(2) 国土交通省と内閣府の評価

第三者の評価として、国土交通省、内閣府のコメントをもとに考察する。

まず、国土交通省「地域づくり表彰審査会特別賞」評価においては⁸⁾、「女性の嗜好に着目した、安全・清潔・快適な通年型のヘルスツーリズムを確立した」として、「地域の資源と健康等のコンセプトを融合させ、通年型・滞在型観光を実現した点と、九州最大級の花公園「長崎鼻」のリゾートキャンプ場を核に「安全・清潔・快適」な海水浴場の整備、海洋療法と温泉療法の導入、ひまわりや長命草による商品開発により、海、温泉、健康食などの小規模ながら恵まれた地域資源を新たな視点で統合、魅力的な場所へと変貌させ、市全体の観光振興を促進させるなど、地域の活性化に功績があり、高い評価を受けた。」と選定理由を挙げている。

一方、内閣府（恋人の聖地）第2回 地域活性化大賞『観光庁長官賞』においては、「海辺の環境整備として、宿泊施設となるキャンピングトレーラーやグランピングテントを整備。併せて多用途で活用できるバーベキューサイトを整備するなど、ビーチの付加価値を高めるハード事業を実施した。並行して取り組んだヘルスツーリズムの核となるタラソテ

ラピーの取組では、ハコモノに頼らない既存の資源を活用したフィールド型タラソテラピーとして、『リラクゼーション』、『アクティビティ』、『食のメニュー開発』の3部門で取り組んだ」として、前述のコンテンツ構築が挙げられ、評価の対象となっている。

ハード面の整備も重要だが、グランピング等他にも多くが実施され、地域の特色を活かした「ソフト」の開発と商品化できた点と女性の嗜好に着目した点では差別化が図ることができたと考えられる。当地において「タラソテラピー」の概念自体を関係者全員が十分に共有できていたか否かは別として、それぞれのコンテンツの開発について地元関係者は協力的であり、いわゆる「公共事業」が成功した一因であったと言える。

事業終了後は、事業に参加しサポートした女性スタッフ達が任意団体「花の岬」を結成し、市と連携して自主運営を図り、コロナ禍においても集客が十分にできている。彼女達が口を揃えていたのは、「本物志向の方々に注目されている」「掛かった税金を無駄にしない」。事業期間中、何度も日本の現状と温泉やタラソテラピーによるフランスの取組みを説明した結果であり、ソフトの構築には、特に日本の現状を理解して共有することが最も重要であったと振り返る。本事業に関連した周辺事業を合わせ、コロナ禍の逆風にも関わらず右肩上がりの売上を挙げている。

(3) まとめ

豊後高田市における温泉地ウェルネスツーリズムとしての「海風タラソテラピー」の取り組みについて考察してきた。地域の観光資源の特質を見極め、徒に「ハードウェア」を構築することに頼らず、地元人材の活用を含めた「ソフトウェア」に焦点を当てて地方創生、地域再生に取り組んだ事例として、全国の温泉地における今後の「ウェルネスツーリズム」の在り方、および温泉地をはじめとする地域振興の事例として関係者の一考となれば幸甚である。

参考文献

- 1) 宝島社(2021):『田舎ぐらしの本』住みたい田舎ベストランキング。
- 2) 斉藤雅樹・森康則・早坂信哉(2021):「豊後高田市における温泉地の日帰り利用と宿泊利用の効果比較～新・湯治の効果測定調査プロジェクトの結果から～」『温泉地域研究』第36号、25-34頁。
- 3) 豊後高田市(2016):「パーフェクトビーチを核とした里海ヘルスツーリズム計画」『内閣府地方創生推進事務局 地域再生計画』。
- 4) 国土交通省(2021):「地域づくり表彰」
https://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/chisei/crd_chisei_tk_000020.html
(2022年7月6日閲覧)
- 5) 恋人の聖地プロジェクト(2021):「恋人の聖地 第2回地域活性化大賞」
<https://www.seichi.net/kasseikataisho2021/>
(2022年7月6日閲覧)
- 6) 例えばUNWTO(2018): Exploring Health Tourism, Defining health tourism, pp.8-9.
- 7) 環境省(2021):「令和2年度温泉利用状況」
https://www.env.go.jp/nature/onsen/pdf/2-4_p_1.pdf (2022年7月6日閲覧)
- 8) 国土交通省(2021):「創意・工夫を活かし個性ある地域づくり活動に励んだ10団体を令和3年度「地域づくり表彰」受賞団体に決定」
<https://www.mlit.go.jp/report/press/content/001428291.pdf> (2022年7月6日閲覧)

講演 I

別府温泉の地学的概要

由佐 悠紀 (別府温泉地球博物館館長・京都大学名誉教授)

はじめに (別府温泉開発の略史)

九州の北東部、別府湾の西岸一帯 (大分県別府市) に温泉が存在することは、古くから全国的に知られていたようである。最初の記録は、八世紀前半に成立した『豊後国風土記』にある。豊後水道を挟んだ愛媛県古記録『伊予国風土記 (逸文)』には、道後温泉の由来を記した「大穴持命 (大国主命) と少彦名命のエピソード」に登場する (石川, 2015)。その後は、鎌倉時代の「一遍上人による鉄輪温泉の開湯」や「元寇での傷病兵の療養」などが伝えられている程度であるが、温泉利用は発展したようで、江戸時代には貝原益軒の『豊国紀行』の記録などが残され、末期には湯治などの旅客のための温泉宿があった (安部, 1987)。明治時代初めには、現在の別府市域で31箇所の源泉が記録されている (別府市, 2003)。

以上の温泉は自然湧出であったが、明治12 (1879) 年4月、現在の別府駅の南東500m 辺りで、小口径の源泉 (約4m 深) が掘削された (外山, 2004)。それまでの受動的

な温泉利用から、能動的な温泉利用の途が開かれたのである。これを契機に掘削が進み、明治30年代には乱掘の様相を呈するほどで、実情調査が行われた (松田, 1905)。明治時代末期には、別府南部域だけで掘湯19、穿湯574があった (山村, 1998)。

掘湯：地面を掘り下げて浴槽を作り、その底から温泉を湧出させる。自然湧出泉に近い。

穿湯：上総掘りによる小口径の掘削泉。

その後、戦争や恐慌などの影響を受けて、紆余曲折はあったが、高度経済成長期の1960年代には、それまでにない勢いで温泉掘削が進み、源泉数も温泉水量・熱量も飛躍的に増加した。他方、温泉資源の枯渇が懸念され、昭和43 (1968) 年から掘削規制が行われた (大分県, 2016)。そうした温泉資源保護対策もあって、1970年代以降、温泉開発はほぼ飽和状態に達したように思われる。

上述の経過をたどり、別府温泉は源泉数・

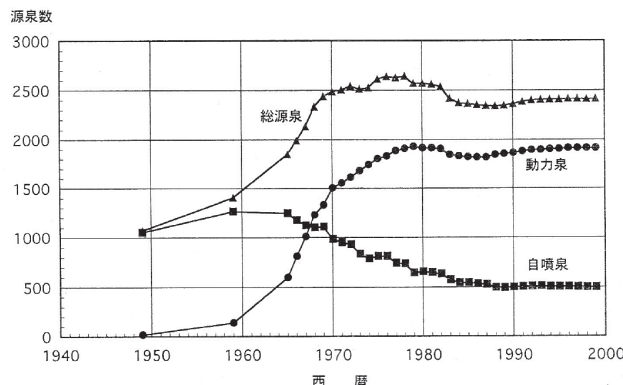


図1 源泉数の変遷 (利用源泉のみ)

採取量で全国最大規模の温泉地となった。令和2(2020)年3月末における源泉総数は2,856、採取温泉水量は102,975L/分で、それぞれ対全国比約10%および約4%である。

図1には、1949年以降の源泉数の変遷が、自噴泉数と動力泉数それぞれの変遷と共に示されている。源泉数が増加する中で、1960年代末頃に自噴泉数と動力泉数が逆転したことが注目される。また、1970年代以降は、一方的な増加傾向は見られない。

以上のように多数の源泉が掘削されたことにより、温泉に関するさまざまな地学的知見が得られた。以下に、その概容を述べる。

得られた地学的知見(概要)

【地形・地質の概略】

別府温泉は、図2のように、北・西・南の三方を山岳で囲まれ、東方で別府湾に接する、南北約8km・東西約5kmの斜面に展開している。

山岳を構成する岩石は、ごく一部を除き、

第四紀火山岩である(竹村, 1984)。最古の火山岩は、南縁に分布する前期更新世(約190万年前)の観海寺安山岩であるが、分布範囲は狭い。これを除く南と北の噴出年代は中期更新世(30万~60万年前)で、山岳の標高は500m程度までと低く、山容は高原状である。他方、西方の急峻な山岳は後期更新世から現世に至る新しい火山で、主峰の鶴見岳(標高1,375m)と北方の伽藍岳(標高1,045m)の山頂付近には噴気活動が見られ、「鶴見岳・伽藍岳」の名称で活火山に認定されている。また、その西方には、独立峰状の由布岳(標高1,583m)が隣接している。由布岳も活火山に認定されているが、噴煙活動は見られない。

中央の斜面は、山岳部から流出してきた岩石や砂礫が堆積した扇状地である。その厚さは、海岸部で500mを超える。すなわち、この地域は基盤が沈降する地溝であり(別府-島原地溝帯の東端部に当たる)、扇状地と南北の山岳部の境は急崖の断層となっている。主要な断層の位置は、図2に破線で示されて

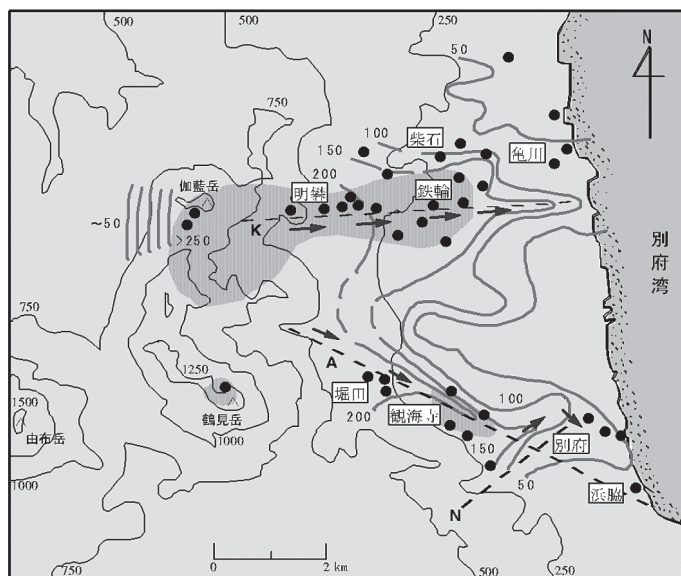


図2 海面下100mにおける地温分布(°C)

矢印は温泉水の流動方向、●は昔の自然湧出温泉
網掛け部分は熱水と蒸気が共存する範囲

いる。北側の断層Kが「鉄輪断層」、南側の断層Aが「朝見川断層」である。

【地下温度分布と温泉水の流動】

図2の曲線群は、海面下100m深での地温（地下温泉水温）の50℃毎の等温線である（Allis & Yusa, 1989）。全体として地温は伽藍岳方向に向かって高く、伽藍岳一帯が別府温泉を涵養する原温泉水域と理解される。また、北縁部では伽藍岳から東に向かって、南縁部では南東に向かって、等温線が鋭く伸び出しており、それぞれが地下温泉水の主要な流路であることを示唆している。実際、地下温泉水位分布から推定される流動方向と矛盾しない。地形的には、北縁部の流路は鉄輪断層、南縁部の流路は朝見川断層に沿っている。

図中の●は古来の自然湧出泉である（鈴木, 1937）。また、図中には、別府八湯と総称される8箇所の温泉地（北縁部と南縁部にそれぞれ4箇所）も記されている。いずれも、主要な流路に沿って分布している。

なお、2つの流路に沿う網掛け部分は、温泉水位と地温の関係から、熱水（液相）と蒸

気（気相）が共存する領域（二相域：熱水が沸騰状態にある）と推定される。

【温泉の流出形態と水量・熱量】

別府温泉の源泉は、流出する流体の形態から、噴気（高温蒸気が噴出）・沸騰泉（蒸気混じりの高温水が噴出）・一般温泉（沸騰点に達しない温泉水が流出）の3種に大別される。別府温泉の象徴である「湯けむり」は噴気・沸騰泉からの高温蒸気が空中で凝結して霧状の水滴になったものである。高度経済成長期には、鉄輪や観海寺などの高地部で噴気・沸騰泉の開発が進展し、湯けむりの数が倍増した。

図3と図4は、温泉開発が一段落した1975年頃における、流出温泉水量および熱量の分布である。水量も熱量も北縁と南縁の高温域で大きく、地下の高温蒸気や温泉水がこれらの地域に集中流動していることがうかがわれる。特に噴気・沸騰泉が多い上流部で、熱量の大きさが目立つ。これらの地区は、図2で網を掛けた部分に当たる。

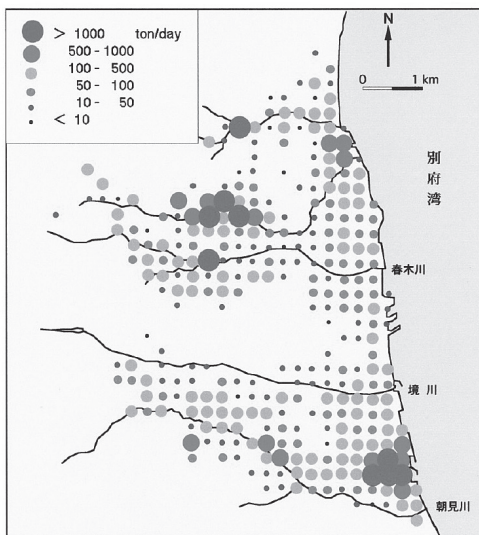


図3 250m四方からの流出水量分布

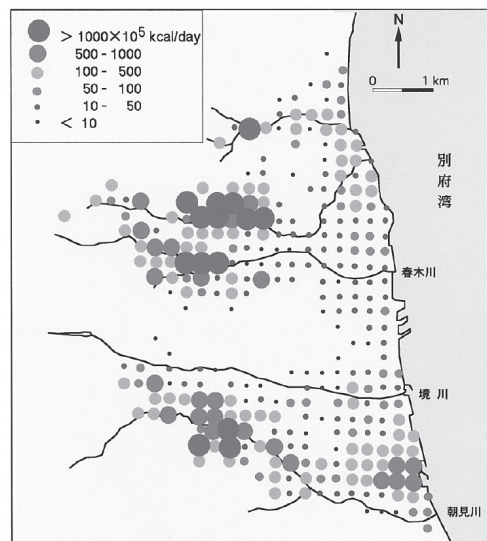


図4 250m四方からの流出熱量分布

表1 別府温泉の源泉数と流出する水量 (ton/day)・熱量 (1011 cal/day) : 1975年頃.

自噴泉については、分当たりの量を日量に換算

動力揚湯泉については、稼働時間を考慮して推定。(熱量は0℃基準)

区分	源泉数	水量	熱量
一般温泉	2,240	28,300	15.0
噴気・沸騰泉	197	26,380	55.5
全源泉合計	2,437	54,680	70.5

表1は、別府全域の「源泉数」および流出する「水量」・「熱量」それぞれの合算である。ただし、噴気と沸騰泉はひとまとめにされている。噴気・沸騰泉の数は全体の8%に過ぎないが、流出水量は約48%、熱量にいたっては約80%を占めている。

【泉質の分布と生成機構】

別府温泉の泉質は多様であるが(大分県温泉調査研究会, 2006)、鉄輪と観海寺に分布する沸騰泉は、典型的な「ナトリウム-塩化物泉型 (Na-Cl型)」である。同様の化学組成は、世界各地の火山地域の熱水に共通したものである。

他方、北縁と南縁の最上流部に位置する明礬地区と堀田地区ではCl濃度が低く、酸性から弱酸性のものが存在すること、また、それらのSO₄濃度が大きいこと、すなわち硫酸酸性水であることが特徴である。とくに、明礬地区のpHは低い。

海岸に近い亀川や別府(狭義)でのCl濃度は中間的であるのに対し、SO₄やHCO₃などはある程度の量が含まれている。とくに、別府地区でのHCO₃濃度が大きい。

別府市南東端の浜脇地区の温泉は、低温でありながら、成分濃度は非常に大きい。これは、温泉開発に起因する地下温泉水圧の低下のため、海水が浸入したことによる。

【深部熱水(原温泉水)の温度と塩化物イオン濃度】

これまで記述をまとめると、別府地域の温

泉系は、伽藍岳一帯の地下深部に分布する塩化物泉型の深部熱水(原温泉水)によって涵養されている。その温度は、温泉水と岩石類の化学平衡を仮定して、250～300℃と見積もられ、さらに、塩化物イオン濃度(Cl濃度)は1,400～1,600mg/kgと推定されている(Allis & Yusa, 1989)。

【水源と滞留時間】

別府温泉の水そのものの起源は、水分子を構成する水素と酸素の同位体比より、天水起源として説明可能であり、マグマ起源の水は検出されていない(北岡ら, 1993)。これはマグマ起源水の存在を否定するものではなく、圧倒的に多量な天水によってマグマ起源水の信号が消されているか、マグマ起源水の大部分も天水起源であるためかもしれない。

天水起源とすれば、別府流域の温泉水の平均的な滞留時間(入れ替わり時間)は、トリチウム濃度の解析により、約50年と見積もられている(Kitaoka, 1990)。

【天水の加温と泉質形成】

浸透した天水が昇温するには、高温流体(火山ガス)の混入が必要である。別府においては、伽藍岳近辺の海面下約5kmの狭い範囲に、火山ガスの上昇を思わせる低い電気抵抗値が検出されている(NEDO, 1989)。

火山ガスの成分は水蒸気(H₂O)が圧倒的に多量であり、その混入によって天水は効率よく昇温する。同時に化学成分も与えられ、温泉水(地熱水)へと変換する。与えられる

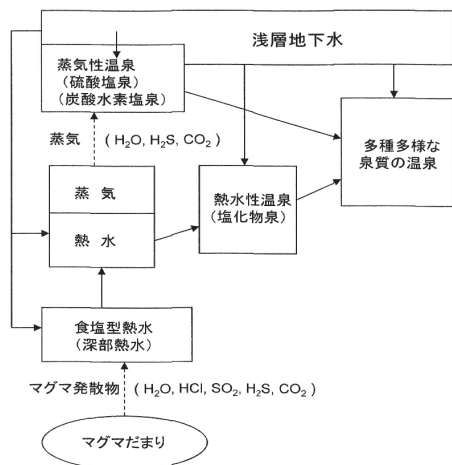


図5 泉質形成の模式図

主要成分はCO₂・SO₂・H₂S・HClであり、これらから酸が生じ、岩石と反応して金属成分を溶出し、さまざまな泉質の温泉水が生成される。そのプロセスを、別府八湯と対応付けて、簡単に記す(図5参照)。また、伽藍岳から鉄輪断層に沿うモデルは図6に描かれている。

[泉質形成のプロセス]

- (1) 地下深部で、浸透してきた天水にHClとSO₂を含む火山ガスが溶解込み、塩酸と硫酸が混合した強酸性の熱水が生じる。
- (2) 周辺の岩石からNaが選択的に溶出され、硫酸イオンを含有するNa-Cl型熱水(原温泉水)が生成される。この原温泉水にはCO₂とH₂Sが遊離ガスとして溶解している。
- (3) 原温泉水が、断層などを通して上昇すると、圧力低下のため沸騰し、液体と気体に分離して、遊離ガス(H₂S・CO₂)の大部分は気体側に移る。
- (4) 蒸気分離後の原温泉水は、浸透水で希釈されながら流動して湧出する。泉質は塩化物泉型(Na-Cl型)である。(鉄輪・観海寺)
- (5) 蒸気は上昇し、地表近くで地下水と混合する。H₂Sは酸化されて硫酸酸性泉が生

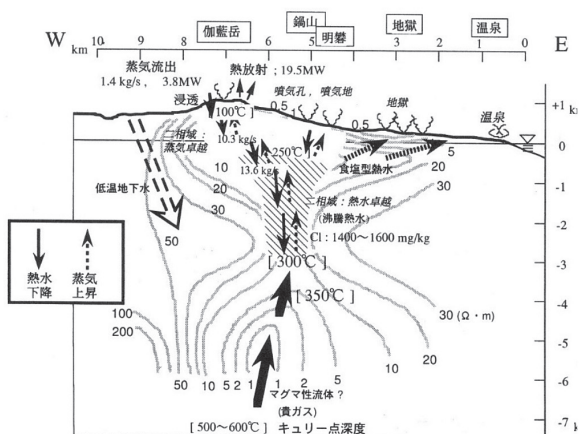


図6 鉄輪断層に沿う温泉系の模式図

じる。CO₂からは炭酸泉(弱酸性)が生じる。両者は岩石と反応し、硫酸塩系や炭酸水素塩系が生じる。(明礬・堀田)

- (6) 上のプロセスで生じた各種温泉水は、下流への流動道程で混合し、地下水で希釈され、流路の岩石類と反応して、多種多様な泉質が生じる。(柴石・亀川・別府・浜脇)

おわりに(海域—陸域の物質循環)

別府温泉系の年齢は約5万年と推定された(由佐・大沢, 2000)。この間に流出した物質量は膨大であり、これを補給する機構の解明が必要である。その過程はマグマの発生と関連した、海溝・トラフでの海洋プレートの沈み込みに伴う「海水や海成堆積物の引きずり込み」である。火山・温泉を通しての、海域と陸域の間の物質循環過程の具体的検証が望まれる。

参考文献

- 安部 巖(1987):『別府温泉湯治場大事典』, 創思社出版。
 Allis, R.G., Yusa, Y. (1989): Fluid flow processes in the Beppu geothermal system, Japan, Geothermics, 18.

石川理夫 (2015) : 『温泉の平和と戦争』, 彩流社.

大分県温泉調査研究会 (2006) : 『大分県鉱泉誌2006』

大分県 (2016) : 『おおいた温泉基本計画』, 大分県生活環境部生活環境企画課.

Kitaoka, K. (1990) : Water circulation rates in a geothermal field: A study of tritium in the Beppu hydrothermal system, Japan, *Geothermics*, 19.

北岡豪一・由佐悠紀・神山孝吉・大沢信二・Stewart, M.K.・日下部実 (1993) : 水素と酸素の安定同位体比からみた別府温泉における地熱流体の移動過程, *地下水学会誌*, 35.

鈴木政達 (1937) : 別府附近の地史と温泉脈, *地球物理*, 1.

外山健一 (2004) : 別府温泉「突き湯第一号」解明, *別府史談*, 18.

NEDO (1989) : 『昭和63年度全国地熱資源総合調査(第3次)広域熱水流動系調査 鶴見岳地域 比抵抗 (MT・CSAMT法) 調査報告書 要旨』

別府市 (2003) : 『別府市誌2003年度版』, 別府市.

松田 繁 (1905) : 大分県別府四近温泉調査報告 (大分県知事への報告書).

山村順次 (1998) : 『新版 日本の温泉地』, 日本温泉協会.

由佐悠紀・大沢信二 (2000) : 別府温泉の年齢, *大分県温泉調査研究会報告*, 51.

講演Ⅱ

別府の温泉と別府“温泉”大学～地獄から極楽への道～

飯沼 賢司 (別府大学特任教授)

はじめ

今回のお話は、まず、別府温泉の特色を自然、景観、文化の面から整理する。その際、「地獄」という呼称をキーワードにしてみる。この「地獄」がこれまでどのようにみなされ、ヒトの生活とどのようにかかわってきたのか、歴史的に整理してみた。これは私の提唱してきた環境歴史学的手法である。その上で、3年前に始まった別府の温泉文化を前面に出した別府大学の挑戦別府“温泉”大学の試みと成果を紹介してみたい。

Ⅰ 地獄を活かす

1. 別府の温泉

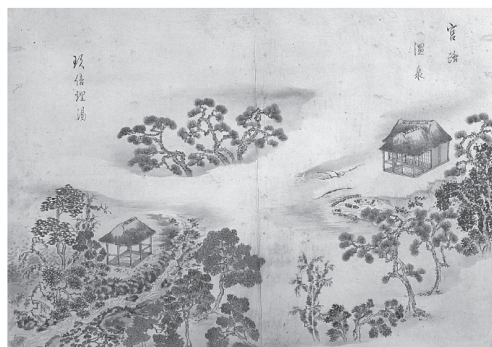
別府の温泉は、100度を超す熱湯を噴出する温泉から、そのほどまで熱くない温泉、その泉質、その色とまでさまざまなバラエティーに富む温泉で、日本の温泉泉種の10のうち7を有するダイバーシティ温泉である。その利用においても入浴利用、蒸し湯、地獄蒸し、湯の花生産と多様性がある。また、温泉を利用した宿泊施設もホテル、旅館、保養施設、湯治宿まで幅広い。しかも、後でも述べるが、共同湯は141か所を数え、公民館と併設されるものも多く地域コミュニティの中心にあった。別府温泉は、湯量はもちろんすべての分野で日本一、世界一の温泉場である。

温泉の最初は、『豊後国風土記』に出て来る赤湯泉、玖倍理湯井などである。赤湯泉は、現在の亀川の血の池地獄、玖倍理湯井は、鶴見の火男火売神社の近くに比定されている。

風土記以降は、長い間、温泉の記述はなく、伝承では、式子内親王が観海寺温泉を訪れ、その墓がといわれるものがあるとか、江戸時代の記録では、濱脇の湯は大友宗麟(義鎮)

が二階崩れの変の際に訪れていたという。江戸時代になると、その温泉としての知名度は一段と高まった。元禄5年(1692)白杵多福寺の高僧鉄帝が濱脇崇福寺の住職に詩文を賦して送った。そこには「冷泉も熱湯もあって家の中や庭に湯があり、四方から人が来て浴し、患を癒している。余った湯は流れ出し海に入る」と別府の温泉の光景を漢詩にしている。

元禄7年(1694)に別府を訪れた貝原益軒は、『豊国紀行』において温泉のことを記述する。益軒は『養生訓』を書くなど健康に関心が強かった。石垣村の光景として、「民家の宅中に温泉十所有、(中略)其館にやどれ



玖倍理湯井(『鶴見七湯廻記』)

る客の外に浴する者なし。故に浴数も時刻も、客の心に任せて自由なり、(中略)薬師堂の辺りにある温泉の傍らに熱湯あり、その上に乾浴する風呂あり、(中略)海中にも温泉出づ、潮干ぬれば浴する者多し」などと様々な温泉のあり方を記している。その一方で、貝原益軒の紀行には、「地獄」という言葉が登場し、その地獄の説明と地獄の紹介がしばしば出てくる。

2. 地獄のはじまり

『豊後国風土記』の地獄の言葉はないが、のちに地獄と呼ばれる場所が記述されている。『伊予国風土記(逸文)』には、宿奈毘古那命(すくなひこなのみこと)が大穴持命(おおなむちのみこと)を蘇生させるために、「大分の速見の湯」から下樋を通して湯をもたらしたのが「道後の湯」である、とある(注※)。道後の湯は、速見の湯(別府の湯)を泉源としていると信じられていた。

建治2年(1276)春、一遍は四国を出て海を渡り、豊後府内において大友頼泰に会う。ここで時宗2代目となる他阿上人が一遍に帰依する。他阿は、浄土宗の僧侶であり、この帰依によって大友頼泰は一遍を支援する。一遍は、その後、大友氏が地頭職をもつ別府の

鶴見村を訪れる。『一遍上人年譜略』によれば、「同(豊後)国府中に至り、鶴見獄のかたわらに温泉あり、これ熊野権現の方便の湯なり」として、一遍は、「温泉」(鶴見の湯)の権現宮にあった社頭の楠木に名号を小刀で刻み、「別時念仏」を行ったと記している。現在の鶴見の権現宮は、現在の火男火売神社(ほのおほのめじんじゃ)のことで、ここに立ち寄ったことは確かであるが、鉄輪に来たかは定かでない。

しかし、鉄輪には一遍が開いたという永福寺(もと松寿寺)がある。その場所が「風呂本」という地籍である。この境内には、元は温泉神社(現在は鉄輪地区の西の山上に移転)があり、ここの祭神大穴持命(おおなむちのみこと)と宿奈毘古那命(すくなひこなのみこと)は、一遍の出身地伊予道後の温泉神社の祭神と同じである。別府の熱い地獄の湯は海をわたりちょうど良い温度で道後から沸いたと一遍も信じていたのであろうか。

一遍は、別府鉄輪の地獄を鎮め、温泉利用を開始したと伝えられる。一遍の段階に鉄輪や鶴見の熱泉を地獄と呼んだかは不明であるが、地獄、極楽の思想が定着した中世には、現世の地獄として地獄の釜のイメージ、血の池の地獄イメージが各所にみられる鶴見、鉄輪、亀川の竈門地区はその光景に合致するものであった。一遍などの宗教活動の結果、地獄というイメージと鉄輪等の噴気する熱泉が重ね合わされ、地名化されたとみてよいだろう。

3. 地獄という言葉

貝原益軒の『豊国紀行』では「鉄輪村は別府の北一里余りに有。実相寺山より猶北也。熱泉所々に多し。民俗是を地獄と称す。湯の上にかまへたる風呂有。病者は是に入て乾浴す。又其辺に湯の川有。瀧有。瀧の高さ二間半斗病人是に打連て浴す」とあり、「熱泉」を「地獄」と呼んでいる。また、「鶴見村に円内坊地獄とて熱湯あり」とあり、地名としての地獄の記述がみられる。風土記にあった「赤湯」



鉄輪蒸し湯一遍上人像

は、「豊国紀行」にはもちろん「和漢三才図会」や『太宰管内志』にも見られるが、古川古松軒の『西遊雑記』（1783年）の段階には、「血の池地獄」の記述に変化している。

『西遊雑記』には「（鶴見岳）麓にかんなわという所有、この所に地獄といふ湯沸く所藍色なり」とあり、「地獄」が数多く存在するという記述が存在する。正徳2年（1712）に寺島良安が編纂した『和漢三才図絵』でも、地獄として鶴見岳が挙げられている。また、寛政7年（1795）の協蘭室の『函海漁談』には、「此の里（鉄輪）には、地獄と称する沸熱の泉甚だ多く、或は、人家の壁、柱の根なども煙を出す所あり」などと記された。このことから別府の「地獄」が広く知られていたことがわかる。

幕末に描かれた『鶴見七湯廻記』（絵入りの解説書）によれば、別府の森藩領の中に今井地獄、山田鍛冶地獄、円内坊地獄など「一地獄」という場所が描かれている。われわれは江戸時代の「地獄」さまをこの絵で確認できる。この地獄は湯けむりが噴き出す地獄の釜のような風景から地獄と呼ばれたと思われる。

4. 地獄観光 厄介ものから観光資源へ

このような「地獄」が観光施設となったのは明治末期以降のことである。明治末期、千寿吉彦が日豊線工事関係の仕事で来別していた時に知人の勧めで海地獄を買収したことに全てが始まる。それまでの海地獄は、所有者

がめまぐるしく変わっていた。やっかいものの海地獄が売れたことから関係者が盛大な祝宴を催したほどであったという。千寿吉彦の構想は、海地獄の湯を引いた温泉付きの高級別荘地を開発することであった。

しかし、明治43年（1910）に海地獄の管理を任された宇都宮則綱により、当初無料で公開していた海地獄が遊覧施設も整えて、入場料を徴収するようになると、血の池、坊主などの他の地獄も入場料を徴収するようになり、「地獄」は観光施設への道を進んでいく。

大正時代に入ると自動車交通も可能となり、「地獄」の噴出状況に伴う変化と奇異な景観の雄大さは、交通の発達による湯治客の増加に比例して、地獄見学の遊覧客を増やしていくこととなった。大正10年（1921）3月15日から5月13日まで、大分市で開かれた第14回九州沖縄八県連合共進会の際に、大分県協賛会から出版された『大分県案内』の中に、血の池地獄、坊主地獄、海地獄が紹介された。

これらの地獄が多くの観光客を集め、また遊園地として人々を集めていたことがうかがえる。海地獄についても、規模の大きさを中心に次のように紹介している。「別府駅より西北約一里半、鉄輪温泉場より西約六町、温泉廻遊道路に沿ふ朝日村に在り、別府付近各地獄中最大にして面積約二反歩余に及び、最高二百十二度の熱湯は一昼夜二万石を湧出し、濃き青藍の色を湛え、白煙濛々として渦



円内坊地獄（『鶴見七湯廻記』）



海地獄

く様物凄く、恰も蒼海に似たり。」地獄の遊覧客数が年々増加するに従い、地獄の所有者には莫大な入場料収入をもたらすこととなった。

地獄遊覧事業はすこぶる有望視され、小噴気孔を掘削して大噴出を誘導することに努め、大正から昭和にかけて、新しい地獄が噴出した。具体的には、大正11年鉄輪地獄、同12年龍巻地獄、同13年無間地獄、同14年鶴見地獄、さらに昭和3年八幡地獄(再爆発)、同5年鬼石地獄、同6年白池地獄、同7年鬼山地獄、金龍地獄、同11年竈地獄、同12年雷園地獄が出現した。分布は温泉地帯中、活動の盛んな亀川-鉄輪-明礬温泉群に属しているものがほとんどであった。これらの地獄は噴気孔、間欠泉、噴騰泉、泥火山類等多種多様の相貌を呈し、成分においてもあらゆる種類のを網羅しており、多彩な地獄群の盛観を示し、全国的に名声を高め、遊覧事業としても独自の発達を遂げている。

5. 油屋熊八の観光構想

遊覧バスの創業：地獄の遊覧に自動車が運行されたのは、大正6年(1917)頃、九州自動車がハイヤーを主に行ったのがはじめといわれている。大正9年に泉都自動車が後を継いで経営に当たったが、6人乗りの乗用車を使用し、1日2回、料金2円50銭で、まだバス事業の体裁をなさない簡素なものであった。油屋熊八は、昭和2年に自動車4台を購



油屋熊八と少女車掌たち

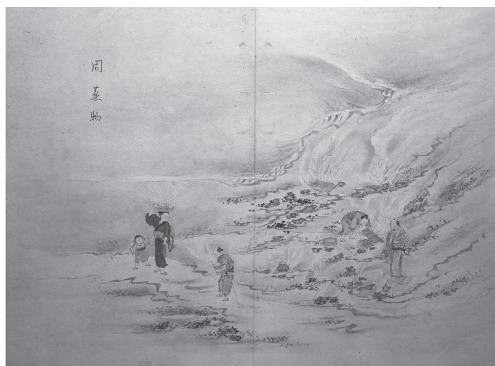
入、翌3年から地獄めぐりを始める。昭和12年の『大別府案内書』では、八幡・鬼山・十万・新坊主・海地獄から釜戸・血ノ池地獄をまわって亀川から北浜へ帰るコースが記載されている。現在、この地獄の風景は、国の名勝にも指定されている。

海の交通、鉄道、道路に目を付けた熊八は別府に留まらず、大阪-別府-湯布院-阿蘇-熊本-長崎、その先に台湾、上海という観光ルートを想定し、別府温泉をその拠点とする大構想を描いたのである。ここに「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」の熊八の名コピーが生まれ、桃太郎など御伽草子などのキャラクターを使った宣伝、与謝野晶子などの文学者たちを招いての観光宣伝が展開したのである。

別府の奥の院である湯布院には、熊八の別荘「亀の井別荘」がつくられ、文人、画家などの文化人が招聘された。別府では、地獄めぐりのバスが走り、日本最初の少女車掌(バスガイド)が生まれ、少女車掌らも由布岳をさし、「山を越ゆれば由布盆地、四季山水の眺めよき、金鱗湖畔亀の井の別荘がある所です。」と宣伝した。それまで、温泉地としてはほとんど知られなかった湯布院は別府十湯に加えられ、昭和に入ると、別府-湯布院の道が整備され、昭和9年には、久大線の湯布院駅が湯布院盆地内にでき、観光の力によって、別府地獄は、別府極楽へと大きく変貌した。

6. 生活と地獄の利用

別府の鉄輪・鶴見、明礬地区および南立石地区には、地獄と呼ばれる場所が点在する。これら地獄は、熱泉だけではなく、熱い噴気の利用が行われてきた。その一つが、俗に「地獄蒸し」と呼ばれる熱い蒸気を利用した地獄釜である。すでに、豊後国風土記の中で、別府ではないが、日田の天ヶ瀬地区の話として「五馬山 この山の一つの峽(を)、崩え落ちて、慍(いか)れる泉、処々より出でき。湯の気は熾(さか)りて熱く、飯(いひ)を炊(か



今井地獄 (『鶴見七湯廻記』)



鉄輪大黒屋の地獄釜

し)ぐに早く熟(な)れり。」とあり、古代から噴気の蒸気利用があったことが窺える。別府では、脇蘭室の『函海漁談』において「菜蔬を煮、麻苧を蒸などの用に供して便利なり」という記述が見られ、江戸時代中期には、「地獄蒸し」の利用は確実にあった。幕末の『鶴見七湯廻記』に見える今井地獄では、近所の人々が噴気口に筵を懸け、その中に、芋や野菜や卵などを入れ、調理する様子が描かれている。この利用法は、別府の鉄輪の湯治宿の地獄釜として今も生活の中にある。農閑期に湯治に訪れた人々は、米や野菜を自分で用意し、長湯治をした。

この噴気の蒸気は、もちろん「蒸し湯」にも利用され、中世、一遍の時代から行われ、近世では貝原益軒などが乾浴という言葉で表現している。火を焚き湯釜の蒸気を送る蒸し風呂(乾浴)は古代以来仏教との関係で一般的であったが、地獄の熱い蒸気を使用するのは別府独特の方法であったと思われる。一遍の開いた永福寺の地名が「湯元」ではなく「風呂元」であることも注目したい。風呂は本来乾浴を指す言葉であった。

また、この蒸気は、明礬地区では、湯の花を作り出した。江戸時代は、これを精製し、明礬を生産していたが、現在は、入浴剤の湯の花の生産となっている。明礬の湯の花小屋はこの地域の独特の景観を形作り、鉄輪の蒸気、地獄を利用した「湯けむり景観」は国の

文化的景観に選定されている。

最後に、別府の温泉文化として是非とも押さえておかねばならないのは地区ごとにある共同湯の存在だろう。ここは地域共同体の要となり、コミュニケーションの場として別府の生活文化を支えてきた。ここは地区や個人で管理されるが、外部からの人も受け入れる別府らしい不可思議な空間である。別府は、ローカリティとグローバルティが併存し、結合する稀有な魅力をもった温泉場であると思う。

II 別府“温泉”大学

1. 温泉学から温泉大学へ

別府はすでに述べてきたように、厄介もの地獄を観光戦略の中心に位置づけ、大正、昭和と世界の別府、国際都市というブランディングに成功した。第二次大戦で一時期打撃を受けるが、戦後、引揚者の町、進駐軍の町として温泉都市は、新たな出発を開始する。別府大学も敗戦間もない、1946年に別府女学院(翌年別府女子専門学校)として産声を上げ、1950年には新制大学の別府女子大学となった。創設者佐藤義詮は「真理はわれらを自由にする」という高邁な理想を掲げ、別府という地に学究の旗を立てた。

別府大学は湯けむりの立ち上る鉄輪の地獄の下に位置する。別府市は、豊富な温泉資源を生かし、古くから保養地や観光地として発

展してきた。別府のただ中にあり、別府温泉の開発者ともいえる一遍上人が上陸した上人が浜と鉄輪をつなぐ中間点にある別府大学は、校内に温泉の湧く大学でありながら、「温泉」を積極的に大学が学問や研究と結びつけることは長い間なかったのである。

この大学では、11代学長であった私、飯沼賢司が2009年度から発足させ担当していた温泉学概論という公開講義があった。大学の特徴を生かす新しい試みであった。しかし、10年を経ても、十分に大学をアピールするものにはなっていなかった。ここに目をつけた本学広報室である。2018年、大学広報誌『Be-News 117 2018秋号』では、別府“温泉”大学というテーマで特集を組み、大学でも「温泉と信仰」「温泉水を活用した介護食の開発」「地熱エネルギーの活用」「地獄蒸し料理の開発」「温泉水を利用したあまぎけの商品化」など様々な分野からのアプローチがあり、温泉と大学の活動が結びついていることを明らかにしてくれた。

取材の過程で、温泉好きが高じて温泉名人となった教員、学生が多数いたことも再発見した。また、別府“温泉”大学のキャンパスも、戦前に南満州鉄道会社の関連会社である華北交通株式会社の療養所である「華北交通別府温泉療養所」の跡地に建てられた。そのため、キャンパス内には今も4つの源泉と7つの温泉施設があり、別府“温泉”大学は、キャンパス内に湯が湧く、全国でも珍しい有泉大学であることも判明した。あふれるほどの温泉ネタがあつまり、「別府温泉大学」の特集は



Be-News 117 2018年秋号

2019年の春にもその続編を組むことになった。

2019年には、仮想大学「別府“温泉”大学」を広報誌上のものだけでなく、温泉大学の活動を本格始動させ、温泉を積極的に大学の顔として打ち出す試みを開始した。

2. 別府“温泉”大学の挑戦

温泉学概論の再生 まずは、「別府“温泉”大学」の活動として、温泉学概論の積極的な広報活動を行った。これまでも公開授業であったが、市民には十分周知されていなかったため、授業の特設サイトの開設や私自身(学長)が出演するPR動画(足湯編・砂湯編・あまぎけ編)を製作・公開、ステッカー、手ぬぐいなどのグッズの制作を行い、ピーアール活動を開始した。

また、2019年秋に新宿のビームスジャパンで開催された、別府とビームスとのコラボレーション企画にも参加し、別府を学ぶコンテンツとして「温泉学概論」を情報発信した。若者に人気のアパレルブランドとのコラボ企画で若い世代にも「温泉学」を知ってもらい、温泉文化への関心を高めてもらう試みでした。

2020年度からの温泉学概論では、地域で活動している方々を講師として招き、市民グループが実施している街歩きに学生を参加させ、別府の街と学生の距離を縮めるプログラムを実施するように試みたが、コロナの蔓延によって、市民の参加や街歩きが十分に展開



温泉学概論特別講義(富士屋ギャラリー)

できなかった。そこで、講義の一部分はオンライン配信を行う工夫も行った。それでも、11月18日には温泉学概論特別講義「日本温泉文化の原点——遍上人の道——」（講師飯沼賢司）を鉄輪富士屋ギャラリーで開催し、地元の方々が多数集まっていた。また、年が明けた2021年2月には、別府“温泉”大学特別講座としてシンポジウム「油屋熊八の世界から別府の未来を語る」を、長野恭紘別府市長、漫画家クニトシロウ氏を招き、別府大学で開催され、学生以外の外部の方々も多数参加いただいた。

共同温泉を守る 2020年実施した温泉学概論の中でNPO法人別府八湯温泉名人会の佐藤正敏理事長（現在別府コミュニティ温泉サポート（ビーコス）代表）に講義をいただいた際に、大学近くの共同湯「前田温泉」が閉鎖の危機に直面して、名人会が管理・運営することになったという話が出た。その話の中で、別府には120か所以上の共同温泉がある。別府市公営の温泉もあるが、そのほとんどが地域住民の管理する共同温泉で、利用者の減少、管理者の高齢化によって運営が困難となり、その数を減らしつつある。共同温泉は、広い湯船につかる気持ちよさ、裸の付き合いができる地域コミュニケーションの場など、あたたかな交流の場である。この共同温泉は別府ならではの温泉文化であり是非守りたい。佐藤理事長は学生に向かって、前田温泉

の清掃、管理の協力をと呼びかけた。ここで10名の学生が協力を申し出た。

かれらは毎日、当番制を組み風呂掃除に励んでいる。新型コロナウイルスの中で、アルバイトが困難な中、密にならずアルバイトでき、利用者から感謝される清掃は、学生たちのもやりがいのある仕事となったようで、市内の別の温泉の掃除を行う学生が出て、今年は掃除1000回を達成したという話もある。授業がきっかけで、学生が街に出て地域の住人と交流し、地域課題を解決することにつながるという別府“温泉”大学の一番の成果となった。

有泉大学の魅力アピール もう一つは学内温泉の活用である。別府大学はもともと華北交通の療養所跡地であり、学内には4か所の泉源と8つの温泉施設がある。2019年11月の学園祭では、別府“温泉”大学の湯として1日限定で特別開放した。別府八湯温泉道と提携し、限定スタンプを発行し、県外の温泉ファンも含めて約60名の方々が参加した。事前の準備や当日の運営に「別府大学温泉愛好会」の学生が協力してくれた。

2020年2月には、本学文学部国際言語・文化学科の芸術系コースの4学生を対象に、温泉染めの講座を実施した。講師は市内で温泉染めの研究をしているユキハシトモヒコ氏で私もこのイベントに参加した。柿洪で予め染めた手ぬぐいを、割りばしなどを使い、輪



前田温泉の清掃チーム



校内温泉開放

ゴムで止め、温泉水に浸し、温泉絞りを創作する。温泉と柿渋のコラボが面白い。コロナ禍の中で思う存分の活動ができなかった4年生には思い出深い企画となった。

3. 産学官連携ジャーナルに温泉大学取り上げられる

2020年11月、産学官連携ジャーナル山口康博編集長が突然取材にやってきた。このジャーナルは、国立研究開発法人科学技術振興機構 産学連携展開部 産学連携プロモーショングループという国の機関が発行する雑誌で、企業と大学、行政機関などと連携し、事業創出を目指す、産学・地域・社会連携、イノベーション、人材育成、知財などの情報を発信する無料の電子ジャーナルである。大学の最先端の取り組みとして、「別府“温泉”大学」の活動に注目してくれたのである。思わぬ取材にこちらが当惑するほどであったが、別府温泉とこれまでお話しした「別府“温泉”大学」のことを的確に取材していただいた。

記事は、翌年2021年1月号に掲載された。その見出しは「**全集中**」で温泉推し **実はすごい別府大学 地方私大は別大を参考にしてほしいと考える理由**」、当時話題となっていたアニメーション映画「鬼滅の刃」の主人公の決め文句「**全集中**」で始まる衝撃的なタイトルであった。わたしのようなおじさんには最初この言葉の意味がわからなかったが、そのわくわくする記事は温泉大学の活動を行っている側にも大きな自信となった。



『産学官連携ジャーナル』

4. 伊予と再びつながる

『伊予国風土記(逸文)』には、道後温泉は速見の湯(別府温泉)は海底の樋でつながっていると書かれている。別府温泉開発は、伊予道後の出身である一遍上人がかかわったといわれる。また、別府の近代観光の父油屋熊八は伊予宇和島の出身である。伊予松山と別府は、聖なる温泉ラインで結ばれる特別な関係にあった。

別府市と伊予銀行が2019年9月に締結した観光振興連携協力協定を通して、2020年度、別府大学は、松山短大、松山大学と、別府“温泉”大学の連携講座を開始した。コロナ禍の中でもあり、人が行き来をする交流は困難な面もあったが、まずは松山短期大学の授業「地域デザイン論Ⅰ」で4月29日に学長飯沼が「別府温泉と四国を結ぶ—日本温泉文化の聖なるライン」の講義をオンデマンドで行い、松山短大の学生が授業の最終段階に「「コロナ収束を見据えた観光振興策」の産官学が協力」というテーマで松山と別府の観光促進の企画を最後に発表するものでした。

7月には、学生の観光促進のアイデアが発表され、別府大学の広報スタッフ、別府市の職員が松山短大の授業での発表会に参加する一方、別府大学でもオンラインで学生の発表を視聴した。さらに、別府大学では、2022年1月、松山の温泉観光の父伊佐庭如矢(いさにわゆきや)、別府観光の父油屋熊八に関係する写真、学生の発表パネルを佐藤義詮記



念館のギャラリーホールで展示すると同時に、松山短期大学の黒田明良教授に本学の温泉学概論で講義をいただいた。また、松山大学の公開講座であるカルスポ講座でも飯沼が別府と松山の温泉に関する歴史を講義した。今年も松山短期大学・松山大学、別府市と松山市の観光交流はさらに展開する予定である。

むすび

別府温泉の多様性は、その泉種だけではなく、宿泊スタイル多様性だけでもない。ヒトと自然が交差し出来上がる文化の多様性が特徴となっている。四国をはじめとする外からやって来た流れ者のしなやかな精神と共同湯に象徴される土俗的な共同体が混合し出来上がり、都会的ではないが、田舎の暖かさ、温泉の暖かさが外も内も区別なく包み込む寛容な温泉文化を形成した。それは別府ならではのグローバルな文化を生み出したのである。別府大学もそのような別府温泉の文化の上に立って、創立された。「別府“温泉”大学」単に広報が生み出した仮想大学ではなく、別府大学の文化を象徴する顔として学生とともに活動してゆくのである。

注記

※2015年(平成27)年9月刊の日本温泉地域学会誌『温泉地域研究』掲載論文の石川理夫「日本の『温泉神』の成立構造と特質」では、伊予国風土記逸文に載せられている大穴持命(おこなむちのみこと)と宿奈毘古那命(すくなひこなのみこと)に記述にこれまでとは異なる読み解きを行った。原文の「大穴持命、見二悔恥一面、宿奈毗古那命、欲レ活而、大分速見湯、自二下樋一持度来、以二宿奈毗古奈命一面、漬浴者、暫間有活起居」の部分は「見」を受け身「被」と考え、解釈を行い、これまで「大穴持命が宿奈毘古那命を蘇生させるために、「大分の速見の湯」から下樋を通して湯をもたらしたのが「道後の湯」である、とある」という解釈を改め、大穴持命(おこなむちのみこと)を宿奈毘古那命(すくなひこなのみこ

と)が再生させたという解釈を行った。本論では、この解釈にしたがって記述を行う。

参考文献

『別府市誌』1985年

『別府市誌』1巻—3巻 2003年

『蒸し湯ちなんなん—蒸し湯の学術的調査報告』2006年

『湯けむり景観保存管理のための専門調査報告書』別府市教育委員会 2009年

『地域社会研究第33号』特集「別府温泉」大学」別府大学地域社会研究センター発行 2021年

石川万実「地域の特色を生かした広報戦略～別府温泉」大学の取り組み～(『私学経営』No.558 2021)

書評

渡辺裕美著：『絶景温泉ひとり旅 そろそろソロ秘湯』

小学館 159頁 2022年4月
定価 1,300円(税別)

本書は、私の十数年来の温泉仲間で秘湯探検家である渡辺裕美女史が著わした温泉本である。著者はちょうど5年前の2017年3月にメディアソフトから『わたしのしあわせ温泉時間』を出版しており、秘湯探検シリーズとしては第2弾になる。以前からたびたび、秘湯をテーマにしたテレビ・ラジオ・雑誌等に登場しているが、この5年間はさらに磨きをかけ、秘湯の旅番組の監修・出演、旅行会社との協業による温泉旅行の監修等々数多くの全国区のメディアで活躍している。

2児の母親としての一面もあり、主婦業・秘湯探検家と「3足のわらじ(古い表現で申し訳ない)」の行動力は、どこから湧き出てくるのか不思議なぐらいである(源泉のように)。今回ご紹介する『絶景温泉ひとり旅 そろそろソロ秘湯』は、同じ絶景温泉でありながら、5年間の蓄積からくるパワーアップを感じる。

本書は、全国の温泉地から66湯を厳選し地域別に特色のある温泉を色々な角度から分類して書かれている。今回は、藤本たみこさんという有名なイラストレーターを起用しており、コミカルな表現が秘湯への険しい道のりの「ハードル」を低くしてくれている。特に著者自らが撮った湯船の写真は、温泉の神秘さと雄大な自然をバックにしたアングルは秘湯には、あまり興味がない読者も魅了してくれると思う。

私自身もここに紹介されている秘湯に10か所近く訪れているが、ほぼ著者の紹介によるものだ。温泉の泉質に関しては、大当たりばかりではずれはない。数少ない湯巡りのなかで、特に印象に残っているのは、群馬県の松の湯温泉松溪館と奈良県川上村の入之波温

泉(しおのはおんせん)山鳩湯である。

松の湯温泉松溪館は、ぬる湯で知られている一軒宿で、ゆったりした肌触りは、夏場の長湯には最高である。夏場以外の時期も加温風呂が隣り合わせに設けられており、温冷交互浴が楽しめる。入之波温泉山鳩湯は、今年(2022年)6月に日帰り入湯(今回で3度目の訪問)したばかり。湯量の多さと浴槽に纏わりつく炭酸カルシウムの結晶は見事で、源泉温度39度のぬる湯は内湯・露天風呂とも入浴客に長湯をさせてくれる。こんな山奥の温泉にと思われるが温泉好きには堪らない。絶えず駐車場が満車状態であるのが頷ける。

野湯に入るにも規制があり、当然、国有林のなかに湧いている温泉(野湯)も多い。国が管理している土地のため、登山道から離れる場合は「入林届」にその旨を記載して、その地域の森林管理署に提出しなければならない。遭難に備えての「登山計画書」を警察に届けることなど、楽しみにはルールが付き物だ。当然、山道であるので熊・蛇・アブ等に注意が必要であるし、硫化水素ガスや高温の源泉は、一歩間違えれば命取りになる。事故が起これば規制区域も増え、周りにも迷惑をかけてしまう。イラストを用いてわかりやすく書かれているので、その部分も是非必読していただきたい。

(高橋祐次)

温泉地情報

中国福建省福州市 進化を続ける古湯の現状

穎川 剛志(電機メーカー勤務)

1 はじめに

中国福建省の省都福州市は、晋代の紀元281年に運河開削工事の折に温泉が湧出、湯池を作り沐浴したとの記述が最も古く、唐代以降も民間入浴や大衆澡堂(温泉銭湯)開設の記録が残る等、大衆入浴文化が栄えた古湯と言える。近代でも市中心部の湯脈一体の井戸掘削を厳しく制限する一方、数多くの温浴施設があり、毎日5万人以上が温泉を利用する。

なお、入浴習慣として45度以上の熱い湯を日常的に好むのは特筆に値する。また、約30年前に習近平氏が福州市トップ(市委書記)を務め、「特色ある温泉を大切にすべき」と述べており、(商業化だけでなく)伝統的な入浴習慣も保護、継承されると思われる。古くから国際通商港として栄え、日本からの多くの使節もここに上陸、台湾の玄関口でもあり、日本や台湾の大衆入浴文化にも影響を与えたことは疑問の余地がない。早朝から深夜まで客足が途絶えることのない大衆澡堂に魅せられ、中国駐在の折に各種温泉施設や近郊に点在する古湯や温泉地を巡ったので最近の状況を含めて報告する(2020年7月～2022年2月に計9回訪問、訪問施設は約70ヶ所)。

2 福州市と温泉の概要

(1) 福州市概要

- ・中国福建省の省都、人口842万人(2021年)、GDP1.1兆元(2021年、全国20位)
- ・紀元前4世紀に越人が流入し、閩越国が成立。地域の中心都市に定まった後、唐代(725年)に福州都督府が置かれ地名も固まる
- ・明代以降は海運で栄え、琉球国の入港地指定(琉球館開設)。17世紀以降は福建省から台湾への移民の玄関口、アヘン戦争後の

開港と茶葉輸出隆盛。近代は造船や軍港等、港湾や通商により発展

(2) 福州温泉史概略

- ・281年(晋) 福州城東門外で運河開削時に温泉湧出、浴池を作り庶民に供する
- ・901年(唐) 新たに見つかった源泉(3つ)に茅葺きの浴池が作られる(古三座)
- ・1042年(宋) 龍徳外湯院(官湯)作られる
- ・1119年(宋) 本格的な大衆澡堂(大衆沐浴の為の最初の温泉施設)が作られる
- ・1489年(明) 城内に6ヶ所の温泉施設、2ヶ所が一般市民に開放(史書記載)
- ・1695年(清) 福龍泉澡堂開業(特別湯、個室湯、大浴場あり、300名入れる温泉施設)
- ・1921年(民国) 温泉施設の商業組合成立
- ・1980年 市内の温泉開発(温泉井掘削等)に関する管理法令発布
- ・2010年 中国温泉之都が選定され、初代称号に選出(福州、重慶、天津の3ヶ所)

(3) 福州の温泉資源

- ・福州市の中心部及び郊外に点在する温泉湧出地として28ヶ所が確認されている。市街区にて利用中の源泉は92、利用量は7500m³/日(約5200ℓ/分) *1998年時点
- ・泉温(湯口)は50℃以上が大半で、70℃前後のところが多い。市中心部の泉質は単純温泉又はアルカリ性単純温泉。北・中部は成分量500～650mg/ℓ、ナトリウム・硫酸塩泉が勝り石膏、食塩を含む。南部は成分量900mg/ℓ前後でカルシウム・炭酸水素塩泉がやや勝り、北・中部と同様な成分も含有。郊外も単純温泉が主ながら成分は多様
- ・91年に温泉供給会社が成立。現状は大半の源泉が政府系企業にて管理されている
- ・温泉施設数に関する公式データは未発見ながら、独自に確認、分類した範囲では[福

州市街区] 公衆浴場：8、大衆スパ：約40、個室浴場：約30、高級スパ：約10、温泉ホテル：約30、療養院：2、[郊外] 公衆浴場：約20、個室浴場：約50、高級リゾート：約20、未確認施設を含め総計は300～400ヶ所程度と思われる（1998年の情報で295ヶ所）

- ・入浴、療養以外の熱資源利用として、農業（育苗、温室、キノコ栽培等）、鳥類の孵化、水産養殖、熱交換での温熱利用（空調等）、食品発酵、皮革加工等、幅広く温泉を活用
- ・市の中心部に温泉公園があり、多くの地元民や観光客が訪れる他、温泉博物館も併設

3 福州の各種温泉施設紹介

(1) 庶民の殿堂 温泉澡堂(200～400円)

福州の入浴法を知るには澡堂（公衆浴場）に向かう必要がある。最盛期（1930年代）には50軒を数えたそうだが現在は市街地では8軒の澡堂が健在で、朝5-6時から夜21-22時まで営業し、終日混雑している。基本は源湯槽（入浴不可）に深めの3連浴槽が並ぶ形式。

驚くべきは湯温で標準は低温浴槽44℃、中46℃、高48℃、更に+0.5～1℃は当たり前。入浴者の多い順は中→高→低で、如何に熱湯好きか理解頂けよう。高温浴槽で全身を使い湯もみする老人に驚愕、中温浴槽ではしゃぐ小学生に脱帽。浴室内にシャワーがあるが、浴槽脇で洗体する方も多し。このような高温浴だから入湯時間は短めで、1-2分浸かって浴槽の縁（かなり広い）で5-10分休む、これを3-4回繰り返す。また、浴室より広い休憩エリアがあってデッキチェア風の竹椅子が並び、浴後は毛布に包まり30分はゴロ寝をする。路地裏や団地内が大半で探すのに苦労すること必至。（お薦め：新沂泉、三山座、徳天泉）

(2) 最も増加中の大衆スパ(600～1200円)

澡堂は男性専科（一部は女性用個室併設）、老人中心で衛生面やマナーも今一つ、という中で、比較的低価格のスパ施設が盛況で近年

新設も多い。とは言え大半は澡堂文化を継承した施設で十分に福州らしい温泉入浴が楽しめる。男女別浴室あり、低温浴槽は適温の41℃程度、浴後は湯上り着に着替え休憩エリアで寛ぐ（竹椅子なし）が主たる違い。伝統の澡堂をリノベした施設は総じて良い印象。（お薦め：福龍泉、百姓温泉館、華清楼）

(3) その他の温泉施設

市内には観光開発された温泉リゾートや高級スパ、個室浴場、温泉ホテル等が数多くある他、郊外にも福州六大古湯に数えられる湯院、貴安の他、連江、長楽等多くの温泉地が点在。目玉として観光開発された源脈温泉園は、全体に市政府の温泉文化への思いを強く感じられる優良施設。観光開発が進む貴安地区は温泉リゾート施設や個室浴場等が点在。湯院は公衆浴場に加え個室浴場が多数。温泉史跡の公園整備が進行中で興味深い。連江、長楽の公衆浴場もお薦めだがアクセスは悪い。



(注) 徳天泉澡堂。筆者撮影(2022年2月)

4 結語

中国の温泉地として福州の知名度はやや劣るが、中国最大級の温泉資源を有し、大都市と一体化して温泉が庶民生活に浸透している類稀な興味深い街である。約1800年前から数多くの文献に記述が残ることも中国ならではの、何度訪れても興味が尽きぬ奥深さから紹介した。なお、2001年編纂の福州温泉志（福州科学技術出版社）を参考にした他、福州温泉博物館、福龍泉、源脈温泉園の揭示物、福州市人民政府からも貴重な情報と協力を得て探索ができたことを付記、感謝の意を表したい。

学会記事

- 来年の2023 (令和5) 年6月4日 (日)・5日 (月) の両日、日本温泉地域学会第37回研究発表大会・総会を長野県野沢温泉村の野沢温泉において開催します。開催にあたっては、野沢温泉村観光産業課、野沢温泉旅館 (ホテル事業協同) 組合、野沢温泉観光協会、財団法人野沢会・伝統的自治組織の野沢組など地元の各機関・団体から全面的なご協力をいただけることになりました。



野沢温泉全景



野沢温泉の共同湯のシンボル「大湯」

大会会場は、温泉街の上手にある「野沢温泉スパリーナ」のコンベンションホールです。収容人数は504席。規模に応じて仕切れることもでき、「密」対策を十分に講じられます。会場へは、野沢温泉中央ターミナル (バス停) を降りて700mほどですが、6月4日 (日) 当日は、北陸新幹線飯山駅から野沢温泉行き直通バスの到着時間に合わせて中央ターミナルからマイクロバスで送迎します。なお、車では上信越自動車道豊田飯山ICから25分です。

一日目の6月4日には昼前から理事会、午後から総会、研究発表大会、講演あるいは地元の方々とのシンポジウムも予定しています。宿泊については野沢温泉旅館組合が窓口となりますので、参加者各自で大会参加を知らせて宿を手配ください。

懇親会については、大会終了後に会場の広いコンベンションホールで立食ビュッフェ形式での開催を検討しています (開催の場合、懇親会参加の宿泊者は一泊朝食付き宿泊料となります)。

二日目の6月5日 (月) 午前中には、自由参加のテーマ別現地視察会を開催します。今のところ3つくらいのテーマ別コース (温泉資源涵養のブナの森コース、温泉街の共同湯めぐりコース、野沢温泉の歴史文化施設探訪コース等) が候補に挙がっています。

野沢温泉は、湯田中渋温泉郷をはじめ温泉資源の豊かな北信 (長野県北東部) 地方に位置し、オーストラリアをはじめ海外からも多数訪れるスキーゲレンデを整備した毛無山山腹と千曲川の間の傾斜地に温泉街が広がっています。鎌倉時代の文書に「志久見郷湯山」として登場するように歴史は古く、戦国時代には北信地方を巡る上杉謙信と武田信玄の攻防においても地域の湯治場として認められて戦禍にまきこまれず、平和な温泉場としての存在意義を発揮しました。

そして温泉資源や地下水、それらを涵養する山林を「村持」で、つまり温泉集落共同体が惣(総)有的に管理、利用してきた慣習・伝統を保つ貴重な温泉地の一つです。野沢温泉では湯仲間が清掃・管理する共同湯(共同浴場)がシンボルの「大湯」をはじめ13か所も無料開放(寸志)されています。こうした「common(s)」としての温泉資源のサステナブルな利用と共同管理の面においても、また、現在はコロナ禍で制限されているとはいえインバウンド時代の温泉地のありようを考える上でも、野沢温泉はとても学ぶことの多い温泉地です。当学会が研究発表大会を開催するのにふさわしい温泉地と言えます。

野沢温泉大会の詳細なスケジュール&プログラムは、2023年3月刊の次号学会誌及び学会ホームページにてお知らせします。

- この野沢温泉での第37回研究発表大会で自由論題の研究発表を希望される会員は、2023年1月10日(火)までに事務局宛に簡単な発表要旨を付けて申し込んでください。

同時に、研究発表予定者は大会要旨集作成のため、発表要旨ワード原稿(各見開き頁:タイトル・発表者氏名・肩書、掲載図版を含めて40字詰め×75行以内で)を4月14日(金)までに編集委員会(編集担当メールアドレス mir-ishikawa@ac.auone-net.jp)宛にメール添付にて送付してください。

- 温泉観光士養成講座in東京開催のお知らせ

来月の10月29日(土)・30日(日)の二日間、東京都三鷹市の杏林大学井の頭キャンパスにおいて都内ならびに大学での初開催となる温泉観光士養成講座in東京を開催します。

会場は杏林大学井の頭キャンパスA棟1階101教室(最大収容人数200名)で、募集人員は90名。受講料は10,000円(教材費・認定証代等を含む)です。学園祭「杏園祭」とコラボ開催となります。JR中央線吉祥寺・三鷹各駅の南口から杏林大学井の頭キャンパス行きの小田急バスが頻繁に出ています。

初日は9時30分開始、16時30分修了。2日目は9時30分開始、試験と認定証授与式を受けて17時10分頃修了予定となっています。

講座内容も新規の講座が加わるなど、新しくなっています。詳しい講座プログラムを確認されたい方、受講を希望される会員は学会ホームページの「温泉観光士養成講座」欄をご覧ください。申込み方法も案内しています。

- 前回の第36回研究発表大会・総会を6月5日・6日に大分県別府市の別府大学において開催し、別府大学教職員・学生や別府温泉郷の方々も多数参加されて計102名の参加者となりました。大会参加者が100名を超えるのは創立以来初めてのことです。

このたびの大会は、会場を提供くださった別府大学との共催で開催されました。大会開催に尽力いただいた中山昭則大会実行委員長、鈴木晶理事、講演いただいた飯沼賢司特任教授(前学長)、会場運営を手伝ってくださった中山ゼミの学生をはじめ別府大学の皆様にあらためて御礼申し上げます。

総会では、学生会員についての規定の再確認と、賛助会員の大会参加費についての改定が承認されました。前者については、「当学会の学生会員は、学校教育法に規定される大学・大学に学籍を有することを基本とし、学生会員は当該学校が発行する学生証を提示して学会事務局に申請し、常務理事会で承認を受けるものとする」ことになりました。後者については、「年会費一口3万円で学会財政に貢献されている賛助会員に依るべく、また積極的に研究発表大会に参加していただくために、参加費については無料とする(賛助会員が団体機関の場合は最大5名まで)」としました。

別府大会から、宿泊は参加者各自が手配することになりましたが、多様な温泉宿泊施設を擁する別府温泉郷ゆえ格別問題なく済みました。懇親会については2019年の梅ヶ島温泉大会で行って以来コロナ禍続きで開催できませんでした。二日目の6月6日にはテーマ別エクスカージョンを実施しました。当初5つのコースを設定していましたが、前日からの激しい雨の影響を考慮して事前に午前中のコースの一つ、「別府のジオコース」を中止(当日は快晴となりましたが)、代わりに別府大学からの提案でキャンパス内に泉源が4か所、入浴施設も複数ある「別府“温泉”大学」視察コースが午後のコースに新たに加わり、参加者に評判でした。各テーマ別エクスカージョンの案内人を務めてくださった別府温泉地球博物館の皆様、齊藤雅樹理事に御礼申し上げます。

- 次号の学会誌『温泉地域研究』第40号(2023年3月下旬刊行)への論文・研究ノート・温泉裁判例研究・書評・資料・温泉地情報などの原稿を募集します。必ず**投稿規程と執筆要領(学会ホームページに掲載)**に従い、直接編集委員会(編集担当メールアドレス mi-ishikawa@ac.auone-net.jp)宛に、原稿送付状と本文ワード原稿ならびに掲載図表・画像等は別途添付(本文ではレイアウト指定のみが基本)にて**原稿締切日の12月23日(金)まで**に送付してください。原稿は常時受付けていますので、常に早めの投稿・送付をお願いします。論文と研究ノートは、査読を受けてパスしたものから順次掲載します。会員の積極的な投稿を期待します。
- 現在、インターネット委員会を設けて、学会ホームページのリニューアル作業に取り組んでいます。そのための独自ドメインも取得しました。リニューアル後のホームページでは賛助会員を含むリンク先も設けます。
- 学会事務局では、創刊第1号から前号第37号まで学会誌『温泉地域研究』バックナンバーを取りそろえています。希望される方は事務局までメール(mikenaga@niu.ac.jp)またはファクスにて申込みください。頒価は一冊1,500円です。ただし、第26号以前の号については10周年記念特集号(第20号)を除き、一冊1,000円(送料別)です。
- 2019年3月刊行の『新版 日本温泉地域資産』も頒価1,000円で販売中です。20冊単位の割引販売委託もありますので、学会事務局までメールかファクスで申込みください。
- **住所を変更された会員は住所変更届を必ず学会事務局へファクスまたはメールにて送ってください。**

日本温泉地域学会役員

名誉副会長 長島 秀行（東京理科大学名誉教授）

会 長 石川 理夫（温泉評論家）

副 会 長 池永 正人（長崎国際大学）

理 事 長 布山 裕一（流通経済大学）

常務理事 内田 彩（東洋大学）

齊藤 雅樹（東海大学）

西村 理恵（温泉ライター）

理 事 赤池 勇治（静岡県庁）

小堀 貴亮（杏林大学）

清水 恵介（日本大学）

鈴木 晶（別府大学）

高橋 陽一（宮城学院女子大学）

高柳 友彦（一橋大学）

谷口 清和（温泉地活性化研究会）

徳永 昭行（長野市開発公社）

中山 昭則（別府大学）

能津 和雄（東海大学）

浜田 眞之（国際温泉研究院）

古田 靖志（下呂発温泉博物館）

山田 等（聖徳大学兼任）

吉野 妙子（山形県温泉協会）

監 事 只野 公康（妙見温泉振興会）

松崎 郁洋（黒川温泉ふもと旅館）

幹 事 北出 恭子（温泉家）

高橋 祐次（東洋大学大学院）

樽井 由紀（奈良女子大学）

萩原 豪（高崎商科大学）

任期：2021（令和3）年11月28日～2024（令和6）年春季大会総会

温泉地域研究 第39号

2022年9月25日発行

編集・発行者 日本温泉地域学会

〒859-3298 長崎県佐世保市ハウステンボス町 2825-7

長崎国際大学人間社会学部池永研究室内

(mikenaga@niu.ac.jp)

電話 0956 (20) 5526

印刷所 株式会社エスアンドピー

FAX 0956 (39) 4908

〒351-0112

振替 00190-6-462149

埼玉県和光市丸山台 3-1-23-405

名義 日本温泉地域学会

Journal of Studies on Spa Regions

No.39
2022.9

contents

Article

- A Study of Warm Seawater Bathing Style---From the Heian Period to the Edo Period
..... Kazuko SHINDO (1)

Studies

- Progress of Vacation Trips and the Oldest Spa Hotel in the Swiss Alps
..... Masahito IKENAGA (13)
- The Case Study of Umikaze (Sea Breeze) Thalassotherapy in Bungotakada
as Wellness Tourism in Hot Springs Area
..... Yasuko JOUANDEAU Masaki SAITO (21)

Lectures

- Geophysical Overview of Beppu Hot Springs Yuuki YUSA (29)
- Hot Springs in Beppu and Beppu“Onsen”University
---The Road and Process From Hell to Heaven--- Kenji IINUMA (35)

Book Review

- Yumi WATANABE [Travel Alone to Superb View Hidden Hot Springs]
..... Yuji TAKAHASHI (44)

News on Spa

- Current Status of Historic Hot Springs which Continue to Develop in
Fuzhou City, Fujian Province, China..... Takeshi EGAWA (45)

- Notes and News (47)